

342
382

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

始





通俗
講話
科學的
化粧法

醫學士 小山田 謙
藥學得業士 三本松 清吉
共著

大正
2. 9. 23
內文

自序

今や我國に美容術、美顔術が流行して來た。此の術たるや、啻に美容法の唯一部に過ぎないばかりでなく、既に之を實地に施して居る者の多くは、只無意味に之を行ひ居るものの如くに見受けらる。而かも此時に際して、吾人の美容に關する書物は、其親切なるものは固より、一も猶未だ世に出でたるを聞かず。

世の開け、人智の進歩したる今日に於て、是が書の尙無きことは、化粧上に、洵に遺憾とする所である。

我等は、曩きに家庭の實用書として、『我家の化粧品』を世に出した。化粧品已に備はれば、化粧の方法を知らんとする

は、寧ろ當然の事である。されば我等は、『我家の化粧品』の姉妹篇として、茲に本書を公にすることにした。蓋し、是れ兩者相俟つて、吾人人間美の發揮に貢献せんことを期するものである。

大正二年第六月

著者識

通俗科學的化粧法 目次

第一章	緒言	一
第二章	皮膚のお化粧法	三
第一項	洗顔と入浴	六
第二項	皮膚の洗浄と石鹼體の洗ひ方としやぼん	一五
第三項	脂漏即ち膩ざりたる顔と頭の處置	二七
第四項	面皰、痤瘡即ちにきびの處置	三三
第五項	皮脂缺乏即ち肌のふれの處置	四三
第六項	わきがの處置と腋窩、手足等の多汗の處置	四九
第七項	母斑即ちほくろ、黒あざの處置	五三
第八項	雀斑即ちそばかすの處置	五九
第九項	夏日斑即ち日やけの處置	六九

第十項	肝斑(即ちしみ)の處置	六
第十一項	白斑の處置	六
第十二項	毛囊角質増殖(即ちさめ肌)の處置	六
第十三項	粟粒腫の處置	六
第十四項	胼胝(即ちさめ、たこの處置)	六
第十五項	鶏眼(即ち魚の眼)の處置	六
第十六項	疣贅(即ちいぼ)の處置	六
第十七項	血管擴張(即ち赤あざ)の處置	六
第十八項	酒皸(即ち赤鼻)の處置	六
第十九項	皮膚の溢血(即ち青あざ、紫あざ)の處置	六
第二十項	癩痕(即ちさざあとの處置)	六
第三章	毛髪のお化粧法	六
第一項	女子の鬚髯等多毛の處置	六

第二項	脱毛(即ちはげ)の處置	七
第三項	頭垢(即ちふけ)の處置	七
第四項	生毛法(即ち毛を生す方法)	七
第五項	染毛法(即ち白髪を染める方法)	七
第四章	美容法	七
	(即ち容姿をよくする方法)	七
第五章	肌の美色法	七
	(即ち色艶をよくする方法)	七
第六章	手足のお化粧法	七
第一項	凍傷、凍瘡(即ちしもやけ)の處置	七
第二項	爪のお化粧法	七
第七章	口の養生とお化粧法	七

第八章 美容按摩……………三

（即ち化粧マッサージ）

第九章 妊娠と美容法……………一〇

第十章 美容料……………二〇

（即ち化粧品）

第十一章 結論……………二九

目次終

通信講話 科學的化粧法

醫學士 小山田 謙 共著
藥學得業士 三本松清吉

第一章 緒言

世の開け、人の智識の進むに伴れて、美容法と云ふ人の容姿を美しくするの方法、乃ちお化粧法も、漸くにして種々に、多くの方面から研究されて來たのである。で、其研究の結果は、美容乃ちお化粧に關する書物は、愈々多くなつて來た。然し、此多くなつて來たところの書物は、我國の著述でなくして、殆んど歐米の書である。就中獨佛の二邦に於ける原著が多いのである。而して是等の原著は、勿論我國の人々の大に參

緒言

美容に關する書物は多くの原著也

緒言

美容業者の
も只
施
に
意
味
無
す
に
過
ぎ
ず

考となるものであるが、中には直ぐ之を採て我國の人の應用に適しないものもあるのである。翻つて我國の状況を観ると云ふと、洵に遺憾ではあるが、是等の適切なる書物は、殆んど全く一つも世に出たるものが無いと云ふても、差支のない程である。

然るに、近頃我國に於ては、美容術の一部なる美顔術と云ふものが流行し出して、お顔を綺麗にするに云ふ事で、今迄在り來りの男女の理髪術と同じ様に、之を一つの専門の職業と爲して、是に依て我身に衣服を着ければ、食べもすると云ふ様に、乃ち生活する者が頓かに増して來た事は、全く實際である。然るに、是等の美容業者も、又常に心を美容と云ふことに勞する人も、其多くは、無論醫學的の智識も缺いて居れば、亦藥學の智識も缺いて居る爲めに、折角理想的な完全の美容法を施行ふと云ふ事が出來ないので、只々無意味なる事を行ふと云ふに過ぎないのである。又實際に斯様な場合が、多いのである。

次に醫學と云ふものは、自分の職掌柄固より是を知るも、尙ほ藥學の

粧
皮
膚
の
お
化

皮
膚
の
攝
生

智識を備ふる醫師に在ても、美容法になると、『我等の關する所に非ず』と云ふ様な風で、少しも頓着せず、之を顧みない者が多いのは普通の状態である。

されば、我等著者が、未だ我國に於て明らかにされずにある所の此の美容法、乃ちお化粧法を、後の章から詳しく逐次に敘述するのも、決して無用の業で無い事を信するのである。されば、醫師以外の者は、本書に據れば勿論の事、醫師にも藥劑師にも參考になり、顧問ともなりて、必ず多少共世を裨益せしめ得るであらうと思ふ。若し夫れ幸に幾分なりとも、本書が社會に實益を與へ得れば、我等著者の本懐は、眞に之に過ぎないのである。是れ敢て本書を公にする所以である。

第二章 皮膚のお化粧法

皮膚乃ち肌のお化粧には、何うしても先づ皮膚の攝生、乃ち肌の養生と云ふ事を專一にしなくてはならぬ。で、此の養生に、殆んど缺くこと

皮膚のお化粧法

皮膚の養生
と水

皮膚の養生
と空気浴
乾燥摩擦

空気浴

就眠前の裸
體操

の出来ないものは、何かと云へば、古へより今の世に至るまで、用ゐられて来たもので、實に水である。此の水は最も重要な關係を有する大事のものである。

而して、此の水の應用の外に、皮膚の養生と云ふ上に就て、特に記載する要のあるものが二つある。此の二つは、何かと云へば、即ち一つは、空気浴と云ふもので、他の一つは、乾燥摩擦と云ふものである。

で、此の空気浴をとるには、何にも殊更に、空気浴と云ふものへ、出掛けて行くには及ばないのである。即ち何人も常に此の空気浴には、實際に慣れて居るのである。是は何う云ふ場合かと云へば、即ち衣服を着換ふるとき、風呂に浴するとき、肌を脱ぎてお化粧をするとき、等の場合には十分に空気浴を爲して居るのである。で、茲に云ふ空気浴は、此の理によつて是れと同じ様に、夜の寢床に就く前に、二三分時間裸體になつて、適宜の體操を行ふのが良いのである。

で、之を爲すには、先づ最初は二三分時間とし、暫く之を慣らし、漸

皮膚の強固
は疾病を防

乾燥摩擦は
皮膚の養生
なる衛生法和

次に皮膚が、空氣の刺戟と云ふものに慣れて來ると、此の時間よりは長く裸體で居つて差支のないので、竟には、此の習慣がついて來る様になると、嚴寒の時に於ても、窓を開け放して此の裸體の體操を行つても、之に耐へられて來るばかりでなく、體操の後には、必ず一種云ふことの出來ない、心地の良き快感と云ふものを覺えて來る様になるものである。

斯う云ふ様に於て、皮膚を強固にすると云ふと、寒冒、皮膚發疹、神經性皮膚病等の病氣に罹る様なことは、殆んど全く爲くなつて來るものである。

次で、乾燥摩擦は、皮膚に何う云ふ關係を有つかと云へば、皮膚の最も緩和なる攝生法、乃ち養生法である。即ち僅かに、寒さを感じず様なときに於ても、之を強く感ずると云ふ様な風に、忽ちにして風を引くと云ふ様な極く感じ易い弱き皮膚を有つ者、殊に老年の人で、皮膚が乾いて弛みを有つ者と云ふ様な人になると、多くは、冷き空氣にも、又水に

視衣の不潔は皮膚を弱くす

も耐へられないもので、是等の皮膚の弱い人は、得て寒冒にも罹り易いものである。そこで、是等の皮膚の全く弱い者は、朝夕の二回で良いから、濕つて居る手拭でなく、全く乾いて居るところの手拭を以て、全身乃ち體の一面を方々強く摩擦するのが良いのである。而して、皮膚の状態は、何う云ふ風に在るのが良いかと云へば、直接其上に在るもの、即ち、視衣等の肌着に關係あること勿論の事であつて、是等の肌着が不潔であると云ふと、何んな健康な皮膚でも、必然之を軟弱にさせる虞のあるものである。其れ故に、不潔となり易き地質の視衣は、殊に之を屢々洗濯して、常に清淨にならしめ置く必要のあるものである。

洗顔と入浴

第一項 洗顔と入浴

一體冷水と云ふものは、皮膚を強固ならしむる作用のあるもので、温

水と湯との效用

湯は、皮膚を清潔にすると云ふはたらしきのあるものである。そこで、顔を洗ふには、冷水を用ゐる、入浴と云うて風呂に入るには、温湯を用ゐるのが、通例である。

然り、顔を洗ふには、普通冷水を用ゐるのが最も良いとするが、如何なる冷水でも、冷水でさへあれば可なりと云ふのではなく、且つ又、如何なる者にも冷水が可であると謂ふのではないのである。即ち、我等の茲に謂ふ水は、或種の水を指すのである。

硬水と皮膚のあれ

乃ち、健康な皮膚を有つ者は、それこそ何んな水にも先づ堪へられるが、然し、所謂硬き水と云うて、石鹼を十分に溶す性質を有つて居る水で無い水、つまり、石灰とか、マグネシア等の成分を多量に含んで居る水、即ち學術上に云ふ硬水と云ふ水を用ゐるときは、健康な皮膚の人でも、何時とはなくして、其皮膚は、はしやいで來るもので、全く脆く弱くなるものである。此の現象を俗にあれと云ふのである。それ故に、皮膚殊に顔とか、手のあれる者には、軟き水と云うて、石

洗顔と入浴

軟水

人工的軟水の製造法

軟水を十分に溶す性質を有つて居る水、所謂學術上に謂ふ軟水と云ふものを用ゐるのが良いのである。然し、此の様な性質を有つてゐる善良の水が無いとすれば、進んで人工的に造れば良いので、是は、一度水を良く煮沸と云うて、煮立たしむれば良いので、斯くすれば、大抵目的を達し得るものであるから、此の水を用ふれば良いのである。然し、此操作を施すのが、面倒と思ふ者には、普通の水に、硼酸ナトリウム即ち硼砂と云ふもの、少量を加へて溶かしたものを用ゐるか、或は又グリセリンの少量を加へて、能く混合せしめたる水を以て洗はなければならぬのである。

膩ぎりたる者にきびの方の顔洗ひ

長病者の顔洗ひ方

此あれたる顔に反して、膩ぎりたる顔や、手掌や、又面皰とか、瘰癧とかの、にきびのある顔は、熱き湯にて洗ふか、或は又冷水と熱湯とを交互に用ゐて、良く洗はなければならぬ。又、久しく病の床に在りたる者などが、初めて顔を洗ふには、必ず先づ、温湯を用ゐるの要あるものである。

世の婦女と其迷信

而して、人は男女の何人なるを問はず、顔なり、手なり、其他の皮膚を洗ふ爲めに、水とか、温湯とかを使ふと同時に、良好なる石鹼を用ふれば、顔其他の皮膚を清浄にすると云ふ上には、其効果が一層顯著になるものなることは、爰に云ふまでもない事である。然るに、世の多くの人の中には、殊に婦女子の中には、此重要な作用のある湯水を用ゐないで、唯人の云ひ傳へなる採るに足らない事を真と信じて、牛乳のみにて顔を洗ふ者が有る。又、糞の湯水を混じて、之を以て顔を洗ふ者も有る様であるが、是等は迷信と謂ふか、誤信も甚だしいもので、高價を費すのみに了るので、其好結果は、決して認められないものである。而して、吾人は、一日に何回顔を洗うて然る可きやと云へば、普通には、唯朝起きて、一回の顔洗ひにて十分である。然るに、世の多くの人中には、特に汚染もしないのに、一日に數回顔を洗ふ者も有るが、是等は無意味に了るのみで有つて、殊に、一日數回石鹼を用ゐると云ふと、顔を綺麗にすると云ふ目的に反して、石鹼の爲めに、顔をわらす様にな

就眠前の洗
顔は不良也

入浴と其回
数

るもので、此場合に於て、質の粗悪なる石鹼を用ゐると云ふと、非常に皮膚の害となるものである。

又、世の多くの人の中には、夜寝床に就く前に於いて、態々顔を洗つて、就眠する者もある様であるが、是も亦多くは誤信に基くもので、顔を洗ふと云ふと、此處に精神上の爽快を感じて、是が爲めに却て、眠れないことがある位であるからして、是に倣はないのが良いのである。

そこで、何人も顔を洗ふと云ふ事は、全く必要のもので、又人の職業等の關係からして、屢々洗ふ必要の者もあれば、之を一日に何回と、全く制限することの出来ないのは當然の事であるが、要するに汚染の虞れ無き人は、屢々洗ふ必要は無いのである。

次で、入浴即ち風呂に入ることは、洗顔と同じく美容上の必要なる條件である。然れども此の回数、幾回位が適當であるかと云へば、是も洗顔の場合と同じ様に、各人の職業の關係等で、之を規定すると云ふ事は、到底出来ない事である。然し、之を常に汚染されぬ境遇に居る人に

入浴をとら
ぬ日に於け
る身體の處
置

入浴時の注
意

浴後の處置
と戶外運動

あつては、衛生上、先づ一週間の期日に於て、二回の入浴を適度とするのである。

而して、入浴をとらぬ日には、皮膚の分泌物の分解し易い體部、即ち、足とか、腋窩とか、生殖器とか、肛門附近を良く洗ふか、或は又良く拭ふのが可いのである。是を知らずに、餘り屢々入浴すると云ふと、竟には皮膚が弛緩して、即ち、たるみゆるんで、是が爲めに外部の刺戟に反應し易くなる、と云ふ様な不利がある。で、此の入浴をとるときには、其時と云ふのがあるもので、何時にても入れれば良いと云ふものではない。即ち食事をとりし後の満腹のときは、必らず之を避けなければならぬのである。

斯くて、風呂に入り温浴をとりし後は、直ぐ全身を摩擦して、成る可く丈浴衣の様な極く輕き衣服を着けて、少時間にて十分であるから、戶外の運動を行ふと云ふと、入浴の効果は一層に大となるもので、皮膚のお化粧には、是が重大なる關係を有つものであるから、成る可く是の

身體を清潔にする其補助品と其適

手拭等使用後の處置

運動を行ふのが良い。
 又、顔を洗ふ場合にも、入浴して全身を綺麗に洗ふ場合にも、又單に手先を洗ふ場合にも、只手のみを以て洗ふか、或は手拭を以て洗ふか、或はタオル、海綿、丝瓜殻等を以て洗ふものであるが、手拭等は、皮膚を摩擦するに便利であるから、其清潔なるものならば、之を用ゐて一向に差支は無いものである。然しながら、タオルの厚きものとか、海綿等になると云ふと、是等のものは、層が厚きことに原因して、元來が不潔になり易きのみならず、是等のもの、洗ひ滌ぎが不十分であると云ふと、斯様な身體を清潔にする所謂補助品の爲めに、却て皮膚病などに罹ると云ふ事が、實際に認めらるゝのである。そこで、身體の清潔を保ち貴ぶと云ふ様な人は、總てに注意深くして、斯様な憂ひある所の、タオルとか、海綿などを遠ざけて、之を使用せぬやうに心がけねばならぬのである。
 又、丝瓜殻とか、或は最も良いところの手拭などは、勿論使用上の適

入浴に絲瓜殻を使用する最も適當なる場合

入浴と浴後の塗擦料

品と認む可きものであるが、使用後は、毎回之を清水にて十分に良く洗ひ出し、次で又、之を乾かし置くのが良いのである。
 此頃、可なり使用せらるゝ様になつたところの、彼のゴム製の海綿と云ふ様なものも、亦使用に適しないものでは無いが、決して適當なる品とは云はれないもので、稍可なるものと認む可きものであらう。
 之を要するに、是等の身體を清潔にならしむるところの補助品には、其重きを置かずして、單に手掌のみにて洗ふのが、最も清潔であつて、最も良いのである。然し、或種の皮膚病、例へば、脂漏とか、面皰とか、瘡瘡等の様な、皮膚の疾病には、丝瓜殻を使用するのが、一番適當である。
 一體に、皮膚と云ふものは、其生理的作用として、入浴すれば勿論、屢々局部を洗ふ爲めにも、乾いて弛みを生じ、竟には脆く弱くなるものであるから、苟も美容と云ふことを念ふ者は、風呂に入つたる後、或は單に洗ひたる後に於て、直ぐに頬はしき事を厭はずに、左の處方例に掲

げたる如きの、一種の脂肪類として之を認め可き價値のある塗料を塗附して、之を皮膚に摺り込む様に擦り付ける事を實行すべきである。斯くすると云ふと、皮膚のお化粧と云ふ目的は、十分に達し得らるゝので、美容となるのは受合ひの事である。尙ほ之許りてなく、此の塗料の塗擦と云ふことは、殊に冬の時候に於て、皮膚の乾く事に因て起るところの、彼の不定消遣性の、皮膚癢痒と云ふ一種身體の痒き病に、有效なるものである。

處方例

(第一)

〔「グラム」量は、我國の二分六厘六毛也〕

カカオ酪

二、〇「グラム」

胡麻油

二、〇

グリセリン

一、〇

右混和塗擦料

(第二)

コールドクリーム
右塗擦料

我等は、續いて皮膚のお化粧上に、無くてはならぬところの清淨材料の事に就て、何人にも必要である所の件々を、次の第二項下に於て之を述べ、次で後の項下より、項を逐うて、お化粧の事を順次に述べることにしてしよう。

第二項 皮膚の洗淨と石鹼

皮膚の洗淨と石鹼

皮膚を根本的に洗淨するには、何うしても石鹼を用ひなければ、殆んど其目的を達することの出来ないものである。と謂ふ可きである。而して、今日の世に於ても、尙ほ或者は、次の様なことを云ふ者がある。即ち、『石鹼は、之を以て洗ふときは、肌的美を損する』と。斯様な事を云ふ人が、未だ實際に在るので、是等の人は、石鹼の作用を斯く信じて居るのであるが、是れは、實に何の據り處も無い大に謬れる見解である。

石鹼と世の

皮膚の洗淨と石鹼

軟石鹼と硬石鹼

即ち、一般に水を以て、洗うて差支の無き身體の部、乃ち體部は、石鹼を以て之を洗ふも、何等少しの障害をも認めないものである。然れども、其用ゐるところの石鹼其ものが、善良なる質を有つて居らぬとなるとき、皮膚に害を與へることあるは、勿論の事であつて、所謂お化粧の目的に適するところの石鹼、即ち衛生上の適品は、之を使用するも、何等の障害を皮膚に與へるものでないのである。

抑、石鹼は、天然に在る脂肪を、苛性カリ、或は苛性曹達と共に、煮沸することによつて生ずる一の化學的結合物である。即ち、此の煮沸に依つて、脂肪中に含まれて在るグリセリンと云ふものは、遊離して、爰に脂肪酸カリ、或は脂肪酸曹達と云ふものが出来るのである。是の脂肪酸カリと、脂肪酸曹達とは、孰れも一つの石鹼であつて、前者即ち、カリ石鹼は、其質が軟かき故に、之を軟石鹼と謂ひ、後者即ち、曹達石鹼は、其質が前者に比ぶれば、硬いものであるから、之を特に硬石鹼と名付けられたるものである。

程の良き緩和な石鹼

皮膚をあらす石鹼

石鹼が皮膚を清潔にする作用と其

カリや、曹達、即ち是等のアルカリと云ふものと、脂肪酸との化合が十分に達すると云ふと、此處に中性石鹼と云ふものを生ずるので、是を俗に云ふと、所謂程の良き緩和なる石鹼と謂ふものであらう。

又、是等のアルカリが、脂肪酸と中和、即ち結合されぬ程、多量に加へらるゝと云ふと、石鹼の中に、アルカリの過剰と云うて、餘分なものが残つて、アルカリ性の強い石鹼、即ち皮膚をあらすところの悪性の石鹼が、出来るのである。

次で、質の良好なる石鹼は、何うして皮膚を清潔にならしめるかと云ふと、實に次の様な理由と、其作用があるものである。

即ち、水と石鹼、所謂中性脂肪酸アルカリと云ふものと、水が結合する際に、茲に泡沫を生じて、其泡沫の下に、一の化學的分解と云ふものが起つて、是が爲めに、此處に鹽基性脂肪酸アルカリと云ふものと、酸性脂肪酸アルカリと云ふものが、生ずるのである。

酸性脂肪
アルカリ
の作用

中に含まれて在るところの酸類と、皮脂と云ふもの、分解に由て生ずるところの酸類との、是の二つの酸が結合して、此處に初めて無害のものを生ぜしむる效能のあるもので、蓋し、是等の酸類は、是が在ると云ふと、皮膚を刺戟して、有害となる基をなすものであるから、是の結合作用は、吾人の身體を清潔にして、美容とならしむる上に就ては、最も重要な關係を有するものである。

酸性脂肪
アルカリ
の作用

次で酸性脂肪アルカリと云ふものは、如何なる作用を現はすものであるかと云ふと、此ものは、過剰に分泌されたる所の脂肪と共に、一種の乳様物を生ずる働きを以て居るものである。

アルカリ
の作用

次で、石鹼の中に含まれて居るアルカリは、如何に働くかと云へば、是のものは、皮膚の角質層の打ち落されたるものを溶解して、其下に在る角質層を膨脹させて柔軟とならしめ、且つ其層に弾力性を有たしめる作用を爲すものである。

而して、是のアルカリと云ふものは、尙ほ右の作用を爲す許りてなく、

石鹼の
泡沫
の作用

實に角質層の下に在る、細胞層と云ふもの、發生を鼓舞せしめて、全皮膚をして、常に新鮮にして、尙ほ其上に、柔軟にならしめる作用のあるものである。

石鹼の微妙
なる作用と
其選擇の要

次で、石鹼を使つて、此處に生ずるところの泡沫は、亦何等かの働きを爲すものであるかと云へば、以上説き來つたところの、化學的の現象を爲す間、器械的に作用するものであつて、即ち皮膚の洗ひ落しを便ならしめるので、つまり、皮膚の上にある小なる汚物などを除き去らしむるに、都合よくせしむるものである。是に於て、化粧上に石鹼を選択するの要は、實に以上記述して來た通り、是が微妙の作用を爲す事に由て、存するのである。

然るに、人は、石鹼を只無意味に石鹼と呼んで、兎角之を軽く視るの風が在るが、是は大變な間違ひ事である。即ち、石鹼は、斯る微妙な作用を爲すものなる事を知らば、之を輕視すると云ふことは、決して其當を得るものでない。そこで、石鹼、若し靈あらば、吾人は、是に向つて、

粗悪なる石鹼の作用に及ぼす

寧ろ宜しく進んで感謝の意を表すべきである。
 我等が、曩きに「公」にしたる、本書の姉妹篇なる「我家の化粧品」中の、其石鹼條下に於て、是が質の良否を、大に選擇するの要ある事を絶叫した所以のものは、前述の如くに、是が實に微妙偉大なる作用を有する事に就て、甚だ大なる關係を有するからである。
 次で、石鹼の質が善良でない場合に於ては、何う云ふ風には是が作用を爲すかと云へば、實に左記の通りになるのである。
 善良でない石鹼、即ち質が粗悪である石鹼は、多くの場合に於て、中に遊離アルカリと云ふ吾人の身體に、悪ろき作用を爲すところのものを含んで居るので、斯様な石鹼を使用するときは、表皮内の細胞の中に在る脂肪は、爰に分解せられるもので、随て復た鹼化される。即ち、更に又石鹼を此處に造る様になるのである。
 そこで、皮膚は、天然の防護物であるところの脂肪と云ふ、大切なものを奪はれて、是が爲めに有害なる影響を受けるものである。

然れども、異常に脂肪を形成するところの皮膚、即ち、俗に云ふ膩ぎりたる肌には、其過剰と云ふ餘分の脂肪を除く爲めに、此場合には、寧ろ弱きアルカリ性の石鹼を、使用すべき事を奨めるのである。
 斯く記述して來ると云ふと、石鹼の作用と云ふものは、既に述べたる様に、常に皮膚の脂肪、即ち皮膚から脂肪分を除き去るに關係するものであるが、茲には、又、是と稍趣きを異にして、洗ひ淨めの作用をも爲せば、又其中に含んで居る多量の脂肪を、他の必要とするものにも分ち與へる、所謂學術上に云ふ塗擦と云ふことを、兼ねる作用を爲すところの石鹼が在るのである。
 即ち、此の石鹼は、其石鹼の中に、澤山寧ろ餘分までの脂肪を含有するもので、世の中には之を大に賞用するの價値あるものと稱する者もあるが、我等は、之を實驗上に徴して觀たる成績を以て云ふと、是に同意し難いものである。即ち、此の種の石鹼は、如何なる程度まで、脂を塗ると云ふ、所謂塗脂の目的を達し得るものであるか、或は、全く此の目

的を達し得ざるならんと疑ふ者である。

そこで、我等は、前にも述べた通り、風呂に入りし後とか、或は單に洗ひし後には、特に、脂肪塗擦と云ふことを行ふ可き事を、推奨したので、又實際に之を行ふ要のあるものである。

人體と石鹼の使用別

之を要するに、吾人は如何なる性質のある石鹼を用ゐるのが、至當であるかと云へば、次の様になつて來るのである。

(一) 膩ぎりたる、即ち、脂漏性の皮膚には、アルカリ性の固形石鹼を。

(二) 厚き角質に富む顔面の皮膚には、中性の流動石鹼を。

(三) 頭部の皮膚には、アルカリ性流動石鹼を用ふ可きである。

(四) 此の他の場合には、常に唯緩和なる性質を有するところの、中性の固形石鹼のみを使用すべきものである。

そこで、巧妙なる多大の廣告に依て吹聴されたる石鹼は、果して之を用ゐるに足るや、否や。

又、美しき名稱を付けられたるところの石鹼は、其質も亦美なりや、

巧なる廣告に依たる吹聴されたる石鹼の多

否や。

又、名聲ある製造業者の製品や、評判高き商店の賣品は、常に之を信頼するの價值あるや、否や。

是等の事は、石鹼を使用する者の、宜しく熟考を要するところであらう。

されば、各人は、我等が曩きに公にしたる、彼の『我家の化粧品』を繙かば、石鹼に於ける各這般の状況を審らかにし得て、是が熟考を要する上に就て、大いに参考に資し得るであらう。敢て其一讀を奨めるものである。

而かも、我等は、現今に於ける様な、香氣馥郁として、價貴く、大膽なる廣告を敢てする石鹼は、其質が良好で無くして、粗悪のものであると思惟するのである。即ち、醫師が、數月數年の長きを治療に盡しても寸效なき皮膚病が、此の様なる石鹼と云ふ一商品の爲めに、忽ちにして治療の效を奏するものでなく、亦石鹼の爲めに、却て之を發生せしむる

世間には
悪い石鹼と
良石鹼と

ことがあるのである。然るに、多くの醫師は、石鹼問題の如きは、己れの職分以外のこととなして、吾人の衛生上に大なる關係を有するものなるも、毫も之を顧みない。又、患者、及其他の者は、自己の用ゐる石鹼は、高價のものであるから、隨て、佳良のものであると、之を矜つて居る様な状況で、是が爲めに、皮膚病の發生したりするなどは、思ひも寄らずに居るので、寔に慨嘆すべきこと共である。

然らば、現今、市中に販賣せらるる石鹼の中、如何なるものを選ぶべきが至當であるか、其選擇法、良否の鑑別法、進んでは、是が各人の家庭に於て、簡易に出来るところの製造法等を會得せんと欲せらるる者は、即ち、拙著『我家の化粧法』に就て、之を承知せられたいのである。

世間には、良い石鹼も數多く在るであらうが、悪い石鹼は、夫れよりもズット數多く在るもので、素人が自分免許の考へからして、藥物を含有せる石鹼、例へば「テール」とか、硫黄などを含んで居るところの石鹼を、使用してはならない。

藥物入りの
素人考へ
ては不可
るに

醫師は
石鹼薬
入りの
物を使
用せず

即ち、或る皮膚病を、醫師に譲らずに、石鹼を以て治療しようと試みるならば、百中の九十九までは、誤りたるものを選んで、却て病苦を増進させること疑ひなしと保證するのである。それ故に、此場合は寧ろ、平素使用するところの石鹼を、其儘使用して、自然に治癒するか、どうかを待つて居る方がまだ良いのである。

そこで、斯様な藥物の入つて居る石鹼、即ち、テール石鹼とか、硫黄石鹼とか、イヒチオール石鹼とか、レゾルチン石鹼とか、クレオリン石鹼とか、又、メントール石鹼とか云ふ様な、藥物を含んで居る石鹼は、決して、素人の自分免許の考へで以て、之を使用すべき性質のものでなく、必ず醫師の命に依つて、之を用ふべきものである。

で、醫師の方からの命に依つて、素人は是等の藥物入りの石鹼を用ゐ得とせば、醫師の方は、亦是等の特殊石鹼を用ゐるか云へば、決してさうでないもので、若し、用ゐることがあるとしても、それは、甚だ稀なる事である。并は又何故かと云へば、是等の特殊なる石鹼は、之を用ゐても、

多くの場合に無効であるからである。縦令、是が効果を奏することあるにしても、其薬物を石鹼以外の應用法で用ゐるに比するときは、其效たるや、眞に微々たるものであるからである。

尙ほ我等は、進んで各人に注意するが、一般に強烈なる香氣を放つところの石鹼は、其使用を禁じたのである。其理由とする所は、鼻は元來鋭敏なるものであるから、此強烈なる香氣を嗅ぐと云ふと、後で却て不快なる感じを覺ゆるのみでなく、香氣を附したる石鹼は、其組成と云ふ出來工合に於て、至つて貧弱にして、是が爲めに、有害となるものが多からである。

又、容易く泡立つところの石鹼も亦、之を使用せぬ方がよいのである。是は又、何故かと云へば、斯様な石鹼は、元來が粗悪なる材料なるところの、彼の椰子油と云ふものを使用して出來たところの、所謂椰子油石鹼と云ふものであるからである。而かも、我國に於ける、各石鹼製造所に於ては、現今さかんに、此の粗悪材料なる椰子油を、其石鹼製造に使

吾人の使用すべき石鹼

椰子油は何故
皮膚を汚す
石鹼を汚す

用して居るのである。それ故に、石鹼の質の粗悪なるものが、市中に跋扈して居るのは、實に、是に原因するものである。吾人が、善良なる石鹼を、手に入れ難いのも、茲に理由が存するので、其良質のものを、手にし難いのも、亦無理ならぬ事で、要は、化粧上に、努めて善良なるものを、手に入る様に心懸くべきことである。

第三項 脂漏 (即ち膩ぎりたる顔と頭の處置)

脂漏の處置

皮膚は、脂腺と云ふところから、皮脂と云ふものを、又、汗腺と云ふところから、汗と云ふものを分泌して、常に、皮膚を滑澤ならしめるものである。

而して、此の分泌の足りないこと云ふ事は、殆んど稀であるが、多過ぎると云ふことは、屢あるものである。

そこで、此の過多の脂肪を分泌すると云ふ事、即ち、脂漏と云ふこと

脂漏

脂漏と其發する年齢

は、實際に於て、吾人の顔の美と云ふことを損するもの、一つである。是は、男女を問はず、一體に春機發動して、其美容と云ふ上に、最も大なる價值を置く可き年齢、即ち十五歳からして、二十五歳の者に多く、殊に肥えて居る者とか、又之と反對に、血液の少き、至て瘦せて居る者、所謂貧血せる者に多く、肌の淺黒き者にも亦、著しく發生するところのものである。

脂漏の種類

で、此の膩ざりたる顔、即ち脂漏と云ふものは、之を二つの種類に別つのが至當であつて、之を次の様に區別するのである。

- (一) 油性脂漏
- (二) 乾性脂漏

是れ也。

油性脂漏の顔貌

而して、第一に屬するところの油性脂漏の顔は、一體何う云ふ風であるかと云へば、此ものは、汚穢なる即ちきたなき黄色を帯びて居るもので、常に膩ざり居つて、是が爲めに、顔面には光澤ありて、幾度之を拭

頭の脂漏

うても、復た忽ちにして、直ぐ故の如くなるもので、此の現象は、殊に鼻の頭に於て、最も著しいのである。そこで、此の様な皮膚には、紙巻煙草に用ゐる様な、薄き紙を觸れしむると云ふと、其紙を汚染して、明らかに、油の斑點を現はすものである。

次で、頭の脂漏に於ては、其毛髪は、恰も油の様な光澤を帯びて、互に相粘り着いて、此處に髪油と相和して、一種脈ふべき異臭、即ち惡臭を發するものである。

乾性脂漏

而して、第二に屬する乾性脂漏と云ふものは、皮脂が多小乾いて、所謂鱗屑と云うて、恰も魚の鱗の様になつて、皮膚に附着するものであつて、其鱗屑を剝し離しても、復た忽ちにして、直ぐ故の様に生ずるものである。で、此ものは、殊に毛髪のある部分に於て、著しいのである。

脂漏の結果

そこで、脂漏の結果は、何うであるかと云へば、脂腺口と云ふものは、粘り着いて、是が爲めに、誠に醜きところの、彼の面皰と云ふ、にきびを形成する様になるもので、竟には、是が其周圍に、炎衝を及ぼして、

脂漏の治癒
と食物との
関係

痤瘡と云ふ、にきびの親分とも認むべきものとなることは、決して、稀に有る事でないのである。

で、是等の脂漏は、何人にも嫌忌されるものであるからして、之を治癒せしめんと思へば、何うしても、先づ第一に、各自の攝る食餌を注意するの要があるものである。即ち之を言ひ換ふれば、自分の取る食ひ物を、氣を付ける必要のあるものである。

然らば、何う云ふものを、注意すれば良いかと云へば、次の様にすれば、良い結果を得らるゝのである。

(一) 總て、充血を起す様な、飲食物を避けること、

此場合は、熱き物とか、蕃椒とか、芥子の様な、辛辣性の物とか、又、酒精即ちアルコールを含有する物、等を避けるのである。酒類は、一般に充血を促して、脂肪の分泌を盛んならしめるもので、彼の酒客と呼ばるゝ者に於て、其顔の赤く、脂多く見ゆるは、實に是が爲めである。

脂漏の治癒
と他の疾病

(二) 又一般に、膩ぎりたる食物を、攝取すること、若し之を攝ること

はあつても、必ず之をひかへ目に取らなくてはならぬ。

尙ほ、此の外に、脂漏に對する處置としては、身體の調節状態と、疾病の有無に注意をしないでならぬもので、是等の状態は、次の様な場合である。

(一) 消化不良

(二) 便秘

(三) 婦人科病

是等の病氣が、若しあるとすれば、必ず速かに之を除かなければならない。

次に、脂漏の療法として、顔の脂漏には、熱き湯を以て、或は熱き湯と、冷たき水とを、交互に使用して洗へば、效能のあることは、既に前にも述べた通りであるが、然し毎夜、前きに述べたる如きの、善良なる石鹼を以て洗ひ、左の處方に示す通りの硫黄膏を塗擦すると云ふと、非

脂漏

常に效を顯はして、治愈するものである。

處方

(第一例)

五—一〇% 硫黄軟膏
右塗擦

(第二例)

沈降硫黄	四〇グラム
亞鉛華	一〇〇グラム
澱粉	一〇〇グラム
ワゼリン	二〇〇グラム
右塗擦	

而して、右の藥劑を塗擦したる其翌朝は、單に、微に温かき水を以て洗ひ、或は軟石鹼を使用して、之を洗ひ落し、晝の間は、刺戟性の無き扁桃油等を以て、極めて薄く塗布すれば、一層に良いのである。

然るに、若し此方法を以てして、人の素質に由て、皮膚に刺戟症狀を起したるときは、夜間藥劑の塗擦を中止して、晝間の塗布のみを爲し、刺戟症狀の全く去りたる後に於て、復び、前の如くに夜間の治療をも、行ふべきである。

尙此他に、試むべきは、毎日一回、左の酒精劑の塗布である。

處方

(第一例)

一—三% レゾルチン酒精
右塗布 適量

(第二例)

二% 抱水クロラール酒精
右塗布 適量

(第三例)

一—五% サリチール酸酒精
適量

右塗布

(第四例)

1% 酒石酸酒精

適量

頭の脂漏の
處置

而して、右の藥液を使用するに當つて、脂漏にして、若し油性のものなるに於ては、之に尙ほ、5%のグリセリンを配合せしめ、又其乾性脂漏なるに於ては、之に尙ほ、5%の蓖麻子油を配合せしめたるものを以て、塗布すると云ふと、其効力は、更に偉大となるものである。
尙ほ脂漏が、頭部に於てのものなるときは、時々毛髪をして、温湯に、鶏卵とか、或は、温湯に、皴粉とか、ふのり等を加へたるものを以て、之を良く洗ひ、其後の處置としては、顔面の脂漏に於ける場合と同様な處置をとれば、良いのである。

第四項 面皰、痤瘡(即ちにきびの處置)

痤瘡は、妙齡即ち、年頃の男女に、主に發生するものであつて、顔、殊に額、鼻、鼻頰間の、皴癢に於て、著しく發生するものである。而して、多くは、恰度、黒胡麻の様なる小さき黒點、即ち面皰と云ふものと、脂漏とを伴ふものである。

にきびは顔
の美容を損じ
らしむる原因
となす

面皰、面皰は、脂漏と同じ様に、脂肪の分泌が多過ぎることに、原因して來るもので、面皰も、痤瘡も、普通に云ふ、にきびで、此の三者は、孰れも顔の美容を損じて、眞に醜くならしめる屈指のものである。
にきびは、顔以外には、何處に發生するか。頸の前面等に發生することあるも、片は、甚だ妙いので、極めて稀に有る例と云うても差支ない位である。

にきびの出
來る部位

而して其軀幹に於て、主に發生する部位に、何の邊かと云へば其正中線から、左右共一手位の廣徑なる線内であつて、胸骨の上から、肩胛骨の間に多く發生し、前は、臍の稍々下まで、後は、薦骨まで及ぶのである。

面皰、痤瘡

療法の
にきびの治

する内服薬
にきびを治

皮膚の化粧法

三六

て、此の面皰、瘡瘡等のにきびを治療するには、如何に、之を處置すれば可いかと云へば、即ち、脂漏に於ける場合と同じ様に、先づ食餌に注意を拂ひ、次で、消化器、生殖器の障害を除く様にすれば、良いのである。尚ほ、之に對して、良效を奏するものは、即ち、藥劑の應用にして、硫黄と、過酸化マグネシウムを以てすれば、頗る偉效を奏するもので、其の處方は、左の如くである。

處方

(第一例)

精製硫黄

適量

右 朝夕一茶匙宛内服

(第二例)

過酸化マグネシウム

適量

右 一日三回一小刀尖宛内服

又、左の複方甘草散は、緩和なる下劑として、之を賞用するに足るも

のである。

處方

精製硫黄

一〇グラム

茴香末

一〇グラム

旃那葉末

二〇グラム

甘草末

二〇グラム

白糖

六〇グラム

右 毎食前一瓦宛内服

又、腸の制腐、即ち腸内に起る酸酵腐敗の作用を、防ぎ止める要あるときは、ザロール、一名サリチール酸フェニールと云ふ藥を、内服すれば可いのである。

處方

ザロール

適量

右 一日三回一瓦宛内服

面皰、瘡瘡

三七

右のザロールは、人の素質に由て、一回一瓦の分量を服用すると云ふと、多過ぎることもあるから、此場合には、勿論是が分量を減じて、内服するの要あるものとす。之は、素人の注意までに、書き加へて置くのである。

而して、貧血せる等の者には、砒素劑とか、或は、鐵劑等を服用せしめて、旁はら多量の牛乳飲用を試みしむるのが良い。

是から記述することは、美容法の範圍外に渉るが、特に、注意までに述べ置くのである。

即ち、若し臭素、一名ブローム、ヨード、テール、ワゼリン等の藥劑を使用するが爲めに、所謂人工的の瘡瘡が、發生したるときは、其使用を禁じなくてはならぬ事は勿論である。

で、此場合に於ける、主なる療法は、専ら外用薬に依るものであるが、先づ、カリ石鹼精を綿に浸して、皮膚に塗り付け、次で簪の耳かき、或は面皰壓出器を以て、面皰、瘡瘡の内容を押し出すのが良いのである。

人工的瘡瘡の處置

而して、外用薬中、最も良好なところの藥物は、次のものである。

硫 黄

昇 汞

チオノール

然し、此の硫黄を用ゐるときは、昇汞を決して兼用してはならない。又、白粉即ち、おしろいの様なもので亞鉛とか、鉛とか、水銀などを含んで居るところの、化粧品を用ゐてはならない。

是は何故かと云へば、是等の金屬を含有して居ると云ふと、硫黄と結合して、此處に、硫化亞鉛とか、硫化鉛とか、硫化水銀、即ち硫化汞を生成せしめて、是が爲めに、顔は、暗褐色或は暗黒色を呈する様になる虞があるからである。

今、左に是が適當なるもの、處方、二三を擧ぐれば、次の如くである。

處 方

(第一例)

硫 黄 華

一五〇グラム

すにきびを治する外用薬

ZnS 100

クムメルフ
エルド氏液

(第二例)

- グリセリン 一〇〇グラム
- 樟腦精 三〇〇グラム
- 薔薇水 五〇〇グラム
- 右 用時振盪塗布

- 硫黄華 一二〇グラム
- 樟腦 一〇グラム
- アラビヤゴム 六〇グラム
- 薔薇水 一〇〇グラム
- 石灰水 一〇〇グラム
- 右 用時振盪塗布

(第三例)

- 昇汞 〇・一グラム
- アラビヤゴム 五〇グラム
- クムメルフエルド氏液 用時振盪塗布

脂漏、面皰、
瘡瘡と按摩
法

重症の瘡瘡
療法

世間には、彼の脂漏とか、面皰、瘡瘡を治療する手段として、又按摩法を行ふ者が在る。即ち此の按摩法は、皮脂腺の内容物を排出して、廣がりたる囊口を、原の形なる大きさに復さしめて、腺の高まりたる作用を普通とならしむる、と稱するので在つて、其術式は、只皮脂を押し出す様に、適宜に按摩すれば、是で足るのである。

而して、重症瘡瘡に對する處置としては、剝離法を施すのが、最も良いのであるが、是れは、醫師が、親しく躬ら行ふべき事であつて、決して素人の行ふべき法でないのである。

又、此の重症瘡瘡に對する療法としては、光線療法、殊に、レントゲン

- グリセリン 五〇グラム
- 苦扁桃水 二〇〇グラム
- アルコホール 二五〇グラム
- 蒸餾水 一〇〇〇グラム
- 右 晝間塗布

ン光線を、應用するのが、最も適當であると説く者もある。
又、近來は、オプソニン療法として、個人の病に對する抵抗力を高めて、病に犯されぬ様にする方法を、唱ふる者もあるが、是は、實際には適し難いものと思ふのである。

第五項 皮脂缺乏(即ち肌のおれの處置)

皮膚の、脂肪を分泌することが、餘りに少量なると云ふと、皮膚は、自然に光澤を失ふもので、竟には乾燥して、落屑する様になるものである。で、此の現象が、顔に於て發生すると云ふと、所謂顔のおれとなるもので在つて、即ち、顔のおれは、此の現象に原因して來るものである。顔のおれと云ふものは、之を學術上に云へば、顔面乾燥症と謂ふもので、元來の脂肪分泌の少ない者が、顔を洗ふと云ふ様なことを、屢々行ふたり、又衛生上に不適當なるところの、石鹼とか、其他の化粧品を用ゐるときに、起るものである。

顔のおれ

で、此が發生した場合の其療法は、先づ第一に、日光とか、或は風雨とかに、直接に當ることを避け、第二の注意事項としては、水と石鹼とを以て、顔を洗ふと云ふ様なことを禁じ、第三には、即ち最後の處置として皮膚に、純良なるところの白色ワセリン、或は、ベルツ水を、塗布するのを最良の手當とするのである。
而して、顔面の他の部、即ち手足等のおれを治するにも、是と同じ様な療法を行へば、良いのである。
今、ベルツ水の處方を示すときは、次の如きものである。

處方

- 苛性カリ 〇・五グラム
- アルコホール 二〇〇グラム
- グリセリン 二〇〇グラム
- 蒸餾水 六〇〇グラム
- 右塗布

皮脂缺乏

發汗作用の區別

第六項

わきがの處置と腋窩手足等の多汗の處置

人の發汗作用、即ち汗を生ずることは、誰人にもあるもので、此の作用は、普通の場合より増加すること、亦減少することがあるものにして、此兩者は、各全身性と、局處性なる部分的との、此の二つに區別されるものだ。而して、全身性の發汗減少と云ふことは、勿論病的に來るものであつて、彼の糖尿病とか、脊髓癆等に於ける全身の病氣に於て顯れるものである。

次で、全身性の發汗増加と云ふことは、或る程度までは、勿論生理的作用で來るものであるが、彼の肺結核等の患者に於て、顯はるゝところの現象は、云ふまでもなく、無論病的である。

而して、全身性のもものは、孰れも、美容上の關係は、尠いので、又局處性のもものでは、發汗減少作用を呈することは、多くは、他の皮膚病に

伴ふものであつて、其發汗増加作用に較ぶると云ふと、頗る稀に有るものである。

そこで、茲には、就中美容上の興味のある局處性の發汗増加、殊に腋窩、其他手足の多汗に就て、敘述することにしよう。

わきが

第一 腋窩の多汗、即ちわきが

腋窩の多汗、即ち、俗に謂ふわきがは、男子にもあるが、殊に女子に於て、多く在る局處性の多汗症である。即ち、發したるところの汗は、容易く分解して、此處に一種厭ふべき異臭を放つものであるから、此の症ある者は、男女を問はず、他の人に嫌がられるものである。

而して、此が療法としては、素人は、多くの場合に於て、水と石鹼とを使つて、屢々洗ふ様であるが、是は、甚だ好ましくないのである。

そこで、是が療法としての、最良の手當は、先づ腋窩を乾燥せしめて、次で、之にアルコホルか、或は醋を塗擦せしめて、然る後に、最後の處置として、之に、左の處方に記するところの藥劑を撒布することであ

わきがの療法

わきがの處置と腋窩手足等の多汗の處置

其處方は、次の如くである。

處方

(第一例)

純次硝酸蒼鉛
右撒布

適量

(第二例)

酒石酸
サリチール酸
硼酸
亞鉛華
滑石
右撒布

五〇グラム
五〇グラム
一〇〇グラム
二〇〇グラム
四〇〇グラム

わきがの洋装する女の

而も、女が洋装して、肩を現はさなければならぬ場合等にあつては、

場合の處置

熱湯を浸したる綿の塊を、二三分時間の間當て、之を數回に腋の下に當て、然る後に、純次硝酸蒼鉛を撒布するのが良い。
又、朝夕、左の處方に據るアルコール劑を以て、十分に拭ひ、後脂肪を塗るのも良い。是も一つの良き手當である。

處方

(第一例)

酒石酸
硼酸
アルコール

三〇グラム
一〇〇グラム
一〇〇〇グラム

(第二例)

硫酸キニーネ
アルコール
右塗拭料

三〇グラム
一〇〇〇グラム

わきがの處置と腋高手足等の多汗の處置

又、わきがの處置法として、適宜大の海綿を、布片にて包みたるものを以て、腋の下に挟ませ置いて、汗を吸収せしめる法もある。然し、此方法に依ると云ふと、汗の爲めに、衣服を汚染すると云ふことは、防ぎ得らるゝも、一方には、是が爲めに、汗の蒸發する作用を妨げて、却て濕疹等の、皮膚病を招くことある故に、是には、餘程の注意を拂はなくてはならぬ。

第二 手の多汗

手に於ける多汗は、男女共同様に来るもので、少年、殊に神經衰弱症の者、貧血に悩む者に多い様である。而して、此の手の多汗症は、其手が、常に冷やかたて在つて、且つ濕潤勝のもので、又粘着し易いのである。で、其色澤は、何うであるかと云へば、多く暗紫色を呈して、其の汗の爲めに、衣服とか、其他の器物などを、汚染し易く、甚だ不快のものである。

而して、是が簡單なる療法としては、左の處方に擧げたる藥劑を以て、

手の多汗と
其處置法と

之を手掌の間に、互に擦り合ふ様にするが、良き手當法である。

處方

硫酸キニーネ

一〇グラム

滑石末

一〇〇グラム

右 撒布、手掌間に擦り合ふ

右の方法にて、若し是が治癒しないときには、電氣療法とか、レントゲン光線療法を試みるのが良いのである。

第三 足の多汗

足に来る多汗は、頗る頑固のものにして、往々數年の長きに亙りても、全く治癒しないことがあるのだ。

で、足は、元來が、常に濕潤勝のもので、又冷やかたて、不快の臭氣を放つもので、殊に夏季に於ては、甚だしいものであるが、此の多汗は、此現象が、一層に甚だしいもので、殊に趾間に於て、即ち指の間に於て、所謂俗に謂ふ、彼の水蟲と呼ぶところの濕疹を生じ、是が爲めに疼痛を

足の多汗と
其處置法と

わきがの處置と腋窩、手足等の多汗の處置

足の多汗に
對する療法に
注意事項

起して、歩行することが困難となり、或は又、痒痒を感じて、是が爲めに安眠を妨げらるゝことがあるばかりではなく、冬の寒冷なる時分になると、凍瘡、即ち俗に謂ふ彼のしもやけを發し易いものである。

て、是が療法としては、先づ第一に、清潔と云ふことを主とする要があるのである。

即ち、一日に數回足を良く洗ひて、足浴と云ふ足丈のゆあみを施すのである。て、此の足浴には、熱き湯を使用するよりも、寧ろ、冷水を以てするのが可いのであるが、此中に、明礬を溶かし入れたる、所謂明礬浴と云ふものになると、尙ほ一層に良いのである。而して、尙ほ是と同時に、左の通りの處置をとるのが良い。

即ち、此の症ある者は、常に屢々足袋とか、靴襪を、其清潔なるものと取り換へて、又、絲瓜殻を足袋の底に入れる様にして、絶えず足を乾かすと云ふ事に、意を注いで、趾の間には、タンノフォルムと云ふ粉末薬を撒布して、綿紗を挟み、尙ほ能ふならば、靴と云ふものを全く廢し

足の多汗の根
治療法

て、下駄を穿く様にするのが、最も必要な條件である。

而して、此の足の多汗の根治法としては、所謂フォルマリンの療法であるが、是は、效を奏すると同時に、亦害を及ぼすことのあるものであるから、醫師以外の者には、勿論其使用が、適しないのである。て、此フォルマリンは、何う云ふ様に使用するかと云へば、是は、五—一〇%の溶液として、用ゐるのである。

又、フォルマリンを含有するもので、ヴェストゾールと稱する臭氣の無い軟膏がある。此のものは、二日間か、乃至は四日間、毎夕一回宛患部に塗布すると云ふと、效を奏するもので、四週日間乃至は六週日の期間は有効であるから、此の軟膏は、試用の價値はあるものと信ずる。此他に、有効なるもの、數例の處方を示すときは、次の様なものだ。

處方

(第一例)

五% ナフトール酒精

適量

わきの處置と腋窩、手足等の多汗の處置

右塗布

(第二例)

一% ペルバルサム酒精

適量

右塗布

(第三例)

五% 抱水クロラール酒精

適量

右塗布

(第四例)

〇.五% タンニン酸酒精

適量

右塗布

(第五例)

硼酸末

適量

右塗布

(第六例)

タンノフォルム

適量

右塗布

(第七例)

五% サリチール酸滑石

適量

右塗布

(第八例)

一% ナフトール、デルマトール

適量

右塗布

以上掲げたる處方例中の、第二例たるペルバルサムは、近來人工的に獨逸に於て、旺んに之を製造して居るので、現に我國に於ては、藥商の手を経て輸入されたるもの、已に多い情況であるから、是に餘程の注意を拂はなくてはならぬ。然らざれば、之を使用しても、原料其もの、不正品なるに因して、決して、效を奏するものでない。

不正に於ては、近來人工的に製造せられたるもの、獨逸に於ては、旺んに之を製造して居るので、現に我國に於ては、藥商の手を経て輸入されたるもの、已に多い情況であるから、是に餘程の注意を拂はなくてはならぬ。然らざれば、之を使用しても、原料其もの、不正品なるに因して、決して、效を奏するものでない。

わきがの處置と腋窩、手足等の多汗の處置

足多汗の全身療法

わきがの學術名

これは、著者が、最近に於て、其の事實なることを探知して、而も適確なる證據を握つたものだから、世の是が、各需用者に向つて、其注意を惹き起さしむる爲めに、特に、茲に記述したのである。

而して、是が全身療法としては、其原因を治療し、冷水摩擦とか、海水浴とか、温泉浴等をとるのを可とする。又、時としては、アトロピンの様なものを、内服せしめることもあるが、是は、只僅かに、三四時間位の發汗を制止し得るに過ぎないのであるから、餘り費用すべき價値あるところの療法でないと思ふ。

尙ほ、序ながらに云ふが、顔の汗とか、頭の汗とか、又背の汗、殊に女子に於て、其太き帯を結びたる時に於て、發するもの等に就ては、前に既に述べたるところの諸療法を、適當に應用すれば、良いのである。

講話が、少しく後に還るが、一體、世俗に謂ふわきがと云ふものは學術上には、之を臭汗症と稱するもので、腋窩、即ち腋の下の汗と、脂肪とに關係するものである。而して、其甚だしき悪臭を放つことに由て、

世人は、わきがの者の物品を使用すると云ふと、直に傳染するといふ位に、之を忌み嫌ふものである。

て、是に對する處置としては、前に述べたる腋窩の汗の療法を行ふより、外に妙案はないものだが、左の處方に據る藥劑を塗擦すると云ふと、一時的でも、治癒を得られるのである。

處方

- | | |
|--------|-----------|
| フオルマリン | 〇・五—一〇グラム |
| 硫 黃 | 一〇〇グラム |
| イヒチオール | 一〇〇グラム |
| 米 | 一〇〇〇グラム |
- 右 糊(山田氏)
毎日石鹼洗條後塗擦

第七項 母斑(即ちほくろ、黒あざ)の處置

皮膚にある色素は、是が増加すること、又減少すること、があるが、

皮膚色素の
先天性と後
天性の増加

皮膚色素の
種別

母斑の生成
する理は尙
不明也

母斑の色と
形状

茲には、美容上、必要ある色素の増加と云ふことに就て、先づ是を述べようと思ふ。
で、皮膚の色素増加と云ふことは、先天性と謂うて、已に生れながらにして來ること、後天性と謂うて、生れおちてから、後に來ること、の、此の二つがある。

即ち、先天性に屬するものは、所謂母斑と稱するもので、後天性に屬するものは、雀斑、即ち俗に謂ふ、彼のそばかすとか、夏日斑、即ち日やけとか、肝斑、即ちしみである。

而して、母斑と云ふものは、一體如何にして、之を發生するものなるか、今日に於ては、尙ほ未だ不明に屬するもので、随つて、是を解決する事が出來ないのである。然れども、是は、恐らく近き將來に於て、解決し得る様になるだらう。

母斑の色は、人の已に知る如く、褐色を呈するか、或は、暗黒色を呈するものであつて、其形は、種々あるが、大きに至つては、大抵帽針頭

扁平母斑

疣状母斑

母斑を除く
方法

大から、其大きいものになると云ふと、手の掌以上の大きさに及ぶものがある。

母斑には、平たくして、且つ滑らかであつて、軟かく、恰も皮膚の表面と、同じ高さにあるものもある。斯様な母斑は、之を扁平母斑と謂ふものだ。

又、乳嘴、即ち乳首の様に、皮膚の表面よりも高く、隆起するものがある。斯様な母斑は、亦之を疣状母斑と謂ふものである。

母斑には、毛の多く生ずるものと、又、少く生ずるものがある。又、此の毛にも、太き毛の生ずるものと、毳毛と謂うて、極く細い毛を生ずるものがある。

で、此の母斑を除く法としては、屢々左記の處方に據る薬布を用ゐるか、或は電氣を以て、之を分解せしむる法を採るか、或は又、外科的に、之を切除しなくてはならない。

處方

一〇% 昇汞コロチウム 適量
右塗布

又、以上方法の外に、亞砒酸の内服を賞用する者もあるが、此れは、薬效上には勿論效果あるべきものなれど、然し之を實際に使用して、速かに奏效を期待すると云ふことは、恐らく、得られざるものであらう。

第八項 雀斑(即ちそばかすの處置)

雀斑、即ちそばかすと云ふものは、其色が、黄色であるか、或は、黒褐色を呈するもので、其大きさは、帽針頭大より、扁豆大の其以上に達することがあるものである。

而して、此の出來て居る皮膚は、決して、硬くなく、滑らかであつて、且つ軟いものである。

で、此のものは、一體何う云ふところに出來るかと云へば、主に顔に生ずるもので、尙ほ此他に、手にも出來ることがあるし、其他、身體の

至る處に生ずるものである。

で、此のものは、一度び是が出來ると云ふと、之を自然に委して置いて、つまり、關はずに於ては、消え失せるものではないのである。

そこで、此の療法としては、前項母斑の條下に述べたところの處置法を行ふと云ふと、之を除き得るものである。それ故に、母斑の處置法を採れば、大抵之を除き得るものである。

雀斑を除く方法

第九項 夏日斑(即ち日やけの處置)

夏日斑、即ち日やけと云ふものは、黄色か、或は、褐色を呈するところの、小さき斑點である。

此のものは、好んで、顔とか、頸とか、手等の部分に出來るもので、殆ど衣服を以て被はれざる身體の部分には、至る處に於て生ずるものである。

夏日斑と其特異質の女

此のものは、殊に赭色の毛髪を有つて居る、皮膚の薄い、肌理の細か

雀斑、夏日斑

夏斑發生の原因

日やけの豫防法と療法

なる女子に於て、多く發する現象なるものである。
 然れども、此夏斑は、秋冬の時候の間には、消退するものにして、
 春の季節から、夏の時節になると云ふと、再び發するものである。
 而して、此のものゝ、發生する原因は、尙ほ未だ明瞭になつて居らぬ
 が、日光に、多少關係を有つて居るだらうと云ふ様な事は、誰人も首
 肯するところらしい。而して、又、此の夏斑と云ふものは、後年にな
 ると云ふと、不思議にも、綺麗に、自然と消え失せるものである。
 而も、夏斑に對しての豫防法は、殊に春夏の二季に於て、赤色か、
 黄色か、或は又、褐色を呈する覆面を用ゐるのが良いのである。
 次で、是が療法は、數少き場合に於ては、其各斑に、流動石炭酸を點
 下せしめると云ふと、其局部に、白色の痂を結んで、殆ど八日にて、此
 の痂が落ちるもので、是が爲めに、普通一般に見る様な、癩痕を遺すこ
 とは無いのである。又、是が治療法として、過酸化水素と云ふ藥物も用
 られるのである。

又、一%の昇汞アルコールに、少量の滑石末と、グリセリンの二三
 滴を混じ、之を振盪して、後に得る粘着性の沈澱物を、夜局部に塗擦し
 て、其翌朝に於て、アルコールを以て拭ひ去る法も、有效なるもので
 ある。
 尙ほ他に、是が療法として、左記の處方に據る藥劑の塗擦を行ふの
 も、亦有效である。然れども、強力なる療法としては、即ち電氣の應用
 である。

處方

- | | |
|-------|----------|
| 白降汞 | 二五—五〇グラム |
| 次硝酸蒼鉛 | 二五—五〇グラム |
| 單軟膏 | 五〇〇グラム |
| 右混和 | 夜間塗擦 |

第十項 肝斑(即ちしみ)の處置

肝斑の區別

肝斑、即ちしみと謂ふものは、褐色であつて、概して日やけよりも斑點が大きく、其發生の原因に據つて、之を種々に區別するものである。即ち、

- (一) 太陽性肝斑
- (二) 中毒性肝斑
- (三) 外傷性肝斑
- (四) 子宮性肝斑
- (五) 消化不良性肝斑
- (六) 肝臓病性肝斑
- (七) 悪液質性肝斑

等であるが、普通肝斑の處置としては、以上記載したるもの、中、第一の太陽性肝斑より、第四の子宮性肝斑に至るまでの處置で實際十分であるから、茲には、此の第一より、第四に至る四種の肝斑の事に就て、之を如何に處置すべきかの、手當法等を述ぶることにしよう。

太陽性肝斑
と其處置

(一) 太陽性肝斑

太陽性肝斑は、日やけの様に、夏の時分に於て生ずることが多いもので、普通是れは、顔に來るものである。

此のものは、太陽の光線に觸れて起るのみでなく、化學的の光線の爲めにも起つて來ることがあるので、此の事實は、近來流行せる光線療法に於て、既に屢々其實例が提供されたることに由て之を證明せられる所である。

て、此のものゝ療法としては、キニーネと云ふ藥物の内服を可とするも、然し是は母斑に對する亞砒酸の内服に於ける場合と同じ様に、其效能は稍々疑問に屬するものである。

(二) 中毒性肝斑

此の肝斑は、發泡膏、芥子泥、ピロガロール、クリサロビン、ヨード、等の使用中毒に於て生ずるものである。

そこで、醫師は、顔、殊に女子の顔に於て、是等の藥劑を用ひ

中毒性肝斑
と藥劑

外傷性肝斑

るには、大なる注意を要する所であつて、素人には、猶更のことである。

(三) 外傷性肝斑

此のものは、皮膚の器械的刺戟、例之ば、掻痒性の皮膚病ある爲めに、絶えず搔く場合、或は、皮膚の歇む間なき壓迫、等に原因して生ずるもので、顔には、殆んど起るものでない。

子宮性肝斑

(四) 子宮性肝斑

子宮性肝斑は、妊娠、或は、産褥中、或は、生殖器に障害あるときに生ずるもので、勿論男子には無いものにして、多くは、額、唇の上、頤に於て來るものである。

肝斑の一般療法

而して、肝斑の一般療法としては、其各原因に對する、先づ、内科的の療法を行ひ、是と同時に、前に述べたところの、日やけの療法を適用すれば良いのである。即ち其條項を参照すべきである。

第十一項 白斑の處置

白斑の定義と其原因

白斑と謂ふものは、皮膚に起る一つの現象であつて、即ち、皮膚にある色素の減少に基いて來るものである。で、此のものは、二十歳より四十歳に至るまでの男女に生ずるものであつて、蔓延するものもある。又、一定の大きさまでになると云ふと、最早其以上の大きさには擴がらぬものもある。

而して、此の一旦減少したる色素を、再び生ぜさすと云ふことは、殆んど不可能事に屬すること、先づ、之は出來ない事であると、認めねばならぬものである。

白斑の處置

そこで、此のものゝ處置法としては、美容上に、只色素の減少したる皮膚を、減少しないところの其周囲の皮膚と、同様な色に染めて、特に是が目立たぬ様に助めるの外には、他に適當なる處置、即ち手當は無

而して、此の方法は、數多くあるが、確實なる效能のあるものは、洵に遺憾なることなれども、今日の場合に於ては、殆んど、是れは、絶無であるといはねばならぬ。

世に、是れを患ふる者は、多々あるので、其美容上、度々是が煩悶を訴へらるゝにも拘はらず、斯様な情況であるのは、其人に對しては、唯同情を寄せる外に他に良策は無いので、如何とも致し難いが、然し、左の處方に據る藥劑は、比較的、良果を收めらるゝものであるから、同患の人々は、即ち是に據つて、其藥劑を患部に塗布せられるのが良からう。

處方

- イヒチオール酒精 三〇〇グラム
- 過クロール鐵 〇二グラム
- 硝酸銀 〇三グラム
- グリセリン 一〇〇グラム

右塗布

第十二項 毛囊角質増殖(即ちさめ肌の處置)

上肢、下肢、等の體部、即ち腕とか、脚とか、其他身體の部分を露き出しにしたる、年若き女等に於て、其肌の甚だしく醜きものは、俗に之をさめ肌と謂ふので、學術上には、之を毛囊角質増殖と呼び、一つの症である。

而して、之を患ふる者の皮膚は、おろし鐵の様に粗く、上膊、即ち腕の上の部に於ての外後方、其他大腿、即ち太股の前外方、腓腸等に於て、或は、忌むべき汚穢なる色を呈し、或は、炎衝的に赤色を呈するものである。

て、此の徴候は、角質が、毛囊口に増殖したるもので、是を能く視ると云ふと、其角質の下に、毳毛は、圓形に捲き込まれて居るのが、見

候 肌の徴

毛囊角質増殖

當法 さいめ肌の手

えるのである。
而して、此のさいめ肌を治療するに、適するものは、第一に、善良なる石鹼と、水とである。
即ち、先づ熱き湯にて、石鹼を使用して洗ひ、又、時々温浴をとる様にして、患部には、カリ石鹼を塗布するのである。斯く、手當を爲す間、夜間には、左の處方に據る軟膏を塗擦するのが良い。

用藥 さいめ肌の外

處方

- 輕石末 一〇〇グラム
- 沈降硫黃 二〇〇グラム
- カリ石鹼 三〇〇グラム
- 豚脂 七〇〇グラム

又、晝間には、一盞の水に、三食匙量のグリセリンを混合せしめて、製したるグリセリン水を塗布するのも、亦良い。尙ほ、此外に、次の處

服藥 さいめ肌の内

方に據る藥劑を調製して、之を塗擦すれば、良いと云うて、是を賞用する者もある。

處方

- サリチール酸 一〇グラム
- 硫黃華 五〇グラム
- グリセリン 五〇〇グラム
- ラノリン 五〇〇グラム

而して、さいめ肌の内服藥としては、肝油を適當と認めるので、之を日少量づゝ服用すると云ふと、結果は、非常に良いのである。

第十三項 粟粒腫の處置

粟粒腫は、其名の示す様に、粟粒大の腫であつて、光澤ある白色か、或は黄白色を呈する結節である。

粟粒腫の處置

粟粒腫の手
當法

此のものは、顔、殊に眼瞼、即ちまぶた、眼の周圍、頬、唇の縁、等に發生して、美容を損するもの、一つである。
而して此の腫の療法として、手當すべきことは、小刀の尖を以て、其表皮のみを破つて、内容を押し出すのを可いとする。
然し、此の療法に於て、其部分が、若し廣ければ、其手當後に於て、カリ石鹼を塗つて、強く擦り込んだる後、ピツク氏の硬膏を、貼つて置くのが良いのである。

第十四項 胼胝(即ちまめ、たこ)の處置

胼胝の定義

胼胝と謂ふものは、皮膚の角質増加に因する肥厚現象である。
而して、此のものは、自然に健康なる皮膚に移り行くものであるが、別に、其處に、明かなる境界とてはないものである。
て、此のもの、生ずるところは、手掌とか、足趾とか等の、常に長く壓迫を受ける體部であつて、初め、水泡と謂ふ水ぶくれの發したる處に、

胼胝の生ず
る機會
のまめ、たこ
の處置

生ずることもある。
而して、手足の或る部分の肥厚は、刺戟を防ぐこともあるが、知覺を弱くして、是が爲めに、時としては、鞭撻を成すこともあるのである。
て、此の胼胝の普通に出来る、其機會は、何うかと云へば、器械體操とか、船を漕ぐこと、か、自轉車に乗つたり、又、車を轆くとか、テニスの遊戯を爲す場合とか、其他、此外に幾多も之を生ずる場合があるのである。隨て、是が美容上の處置を要求する者は中々に多いのである。
て、是が豫防法及び療法としての適當なる手當は、先づ第一に、壓迫を避けることに注意を拂はなければならぬ。即ち、是を生ずる原因が、若し履き物にあるとすれば、夫れを改良すると云ふ様にして、一旦是が生じたならば、溫浴をとつて、又石鹼の洗滌を行ふて、其患部には、左の處方に據る塗布薬を使用するのが良いのである。

處方

一〇% サリチール酸コロヂウム

適量

右塗布

第十五項 鶏眼(即ち魚の目の處置)

鶏眼、即ち俗に謂ふ魚の目は、胼胝と同じ様に、皮膚の角質肥厚であ

る。て、此のものゝ外見は、白色を呈すれども、中央は、青色を帯ぶる故に、所謂魚の目と呼ばるゝに至つたものである。而して、此の魚の目の中央は、恰も釘の様に深く、皮膚の中に侵入する突起があつて、之を壓へると云ふと、稍々強き疼痛を感じるもので、歩行は、困難である。而して、此のものゝ療法は、亦胼胝と同じ様に、壓迫を避けて、履き物の改良、温浴等を施すのである。而して、此の温浴をするには、水酸化カリウム、即ち苛性カリを少量に加へて浴すると云ふと、一層に良いのである。て、此のものゝ治療に當つて、藥物を應用するものゝ中で、特效ある

鶏眼の療法

鶏眼と胼胝の療法に就ての注意

ものと認むべきものは、實に、サリチール酸であつて、就中一〇%の、サリチール酸コロヂウムの塗布が至便である。又、之に一〇%の割合に、レゾルチンを加へるのも、亦良好の結果を得るものである。

鶏眼とか、胼胝に對する療法として、世には往々無謀なる、所謂素人療治を爲す者があるが、是は大なる誤りであつて、是が爲めに、大害を招いた不幸なる實例は甚だ多いのである。

そこで、是を患ふる者は、所謂素人療法を行ふことを止めて、茲に示したる處置を採れば、過が無いのであるから、各人は、宜しく戒慎すべきことである。

第十六項 疣贅(即ちいばの處置)

疣贅、即ちいばは、表皮全部の増殖であつて、好んで手に生ずるものである。

鶏眼、疣贅

而して、其大きさは、米粒大より、蠶豆大に及ぶもので、其表面は滑澤のものもあれば、亦粗糙のものもあるのである。
 色は、周囲の健康なる皮膚の色と同じであるか、或は褐色を帯びるもので、急に澤山な数が出来ることあれば、亦自然に消え失せることもある。

疣贅は傳染す

此の疣贅は、俗説に、傳染すると云はれて居たが、此れは、決して迷信でないの、學術的研究の結果は、今日に於ては、曩の迷信と思はれて居たものは、却て眞理であることを發見證明したのである。

いぼの民間療法

疣贅と云はれるもの、中でも、其莖の有るものは、民間療法に於て、能く取り除かれるものである。即ち、蜘蛛の絲とか、或は、細き絹絲を以て、其莖を結紮すると云ふと、遂には何時とはなしに、脱落するものである。此の療法は、民間療法の中でも、最も廣く知られたるところの方法であつて、今猶ほ旺に行はるゝところの療法である。

いぼの療法

疣贅は、何うしても、之を取り除かなければならないもので、此の目

的には、いぼを、エチールクロリドにて、先づ凍結せしめ、次に剪刀を以て、皮膚の表面の高さに切除し、後之に、發烟硝酸を點じて、二三分時間を經過したる後、銳匙を以て、基底から掻き取りて、其痕を、一半クロール鐵液にて腐蝕するのが、良い療法である。

然れども、此の方法は、時として人が嫌ふことであるから、若し是を忌むときは、5%の昇汞コロヂウムか、或は、一〇%のサリチール酸コロヂウムの塗布を試むるのが可い。

いぼの藥物療法は、幾多もあるのであるが、外用のものは、是で十分であるから、茲に記述することを止めて、續いて、異なるところの療法の適當なるものに就て、述ぶることにしよう。

で、此の異なる療法とは、何かと云へば、即ち、電氣分解法である。此の法は、亦實際に應用されるところの法である。

而かも、疣贅の數多き場合に於ての療法として、異なるところの法は、レントゲン光線療法を施すのが適當の法である。

又、壯年の者に生ずる扁平疣贅が、亞砒酸の内服に由て全治することは、既に屢々認められたるところであつて、全く事實なのだ。

第十七項 血管擴張(即ち赤あざの處置)

此の血管擴張症は、俗に赤痣と呼ぶものであつて、其大きさは、帽針頭大から、其以上に頗る大きいものがある。而して、是が発生する部分

は、一定して居るものではない。而かも、美容上に、治療を要するものは、顔とか、手と云ふ様な、衣服に被はれざる體部に生じたる場合のものか、或は、衣服に被はるゝも、其甚だ大なる場合のものである。

初生兒の赤あざと其治療の處

初生兒に於て見る赤痣は、自然に消え失せることあるを以て、其是が治療は、時期を待つて行ふのが良い。而して、此の赤痣の治療法としては、又種々なる方法があるものであるが、要するに、藥劑を以ての外用療法、電氣分解療法、レントゲン光

線療法に過ぎないものである。然れども、是等の方法以外に、特に外科的手術を行ふ方法もあるが、多くの場合には、此法を應用せずして、治療するものである。

て、元に還るが、藥物療法の中で、有效なるものとして、用ゐらるゝところの藥劑は、次の様なもので、之を塗布すれば良いのである。

- (一) 一〇% 昇汞コロヂウム
 - (二) 五% クロール亞鉛コロヂウム
- 等である。

第十八項 酒皸(即ち赤鼻の處置)

酒皸の定義

酒皸、即ち赤鼻と稱するものは、血管の擴張に因する、顔の潮紅、即ち赤くなつた現象を指すものである。此のものは、鼻の尖に發すること、最も多き故に、之れを又の名、酒皸鼻と謂ひ、又、單に赤鼻とも謂ふので、是等の名稱の由て來たのは、畢竟、鼻頭に於いて主に發するからで

酒皸と女子の覆面

あらう。然れども、此の酒皸は、單に、鼻頭に於てのみ發するものでなく、同じ顔面の他の部分なる、額とか、頬とか、又、頤にも發することがあるものである。彼の脂漏に於ける様な瘡疹を起す動機は、總て酒皸を起す原因となるものである。

冬の時節に於て、女子が覆面を使用するときは、其覆面は、呼吸氣の爲めに、濕潤せられ、其濕つたところの、其ものは、鼻の尖とか、頬の突き出たる部分を摩擦して、其結果は、此酒皸を生ずることある故に、覆面と云ふものは、之を冬季に於て使用するよりは、寧ろ、夏の時節に於て使用する方が有理であらう。并は、又何故かと云へば、既に述べた通りに、之を冬に於て使用するときは、障害となり、夏に於て、之を使用するときは、克く日やけを防ぎ得るからである。(夏日斑の條項を参照せらるべし。)

そこで、此の覆面を使用するときは、強く之を結び付けなくて、弱く

酒皸を起す原因と其起す場合

鼻瘤

即ち、緩く、成る可くは、之を軽くして自由に下げて置くのが良いのである。

酒皸は、消化器、婦人に於ては、尙ほ其生殖器に關係のあるものである。例へば、酒類を多量に飲用するときは、是に原因して胃腸を損し、延いて酒皸を起す等である。然し、酒皸は、又少量の酒を嗜む者に於ても、之を見ることがあるのである。

尙ほ、酒皸の起る場合は、年尙若き處女が、縁遠くして、其性慾を禁ぜられたる儘、老嬢となりたるとき、或は又、生殖器病を有して、月經不調なる女子が、其閉止期に至りたるとき、等にも起ることがあるのである。

で、此酒皸が、著しければ、鼻は醜き形を現はすもので、遂には所謂鼻瘤と成るものである。

而して、酒皸の治療法は、其原因の多種なるに随つて、是が療法も亦種々あるのである。

即ち、鼻腔内に病あれば、先づ之を除き、又、鼻眼鏡とか、重き普通の眼鏡を使用することはを廢するが良い。

又、脂漏を伴ふ者に於ては、硫黄劑を以て、先づ之を治療し置いて、然る後に、是が療法を行はなければならぬ。

而して、酒鼓其ものを治療するには、五〇%のレゾルチン軟膏を以て剝離法を行ふのが良い。然れども、此の療法を行ふに際して、若し結節あるに於ては、先づ外科的切除を爲して後、剝離法を施すべきである。

人によると云ふと、酒鼓の療法としては、按摩法を施すのが良いと云ふ者もあるが、此法は、決して、寸效もあるものでない。又、之を洗ふと云ふことも避けなければならぬ。并は又、何故なるかと云へば是等は、血管の擴張を増進せしめるものであるからである。そこで、我等は、決して是等の方法には同意することが出来ない者である。

酒鼓は、又温度の變換する際に、著明となるものだから、室内より室外に出づるとき、又、室外より室内に入るときは、ベンチンを浸したる

布を、當ることを推奨する者もあるが、是に據て、果して、其増悪するのを、防ぎ得るものなりや、否やは、大に疑はしいのである。然れども、熱き湯に浸したる海綿を當てることは、温度の變換する際に於ては、固より有効である許りでなく、顔に、潮紅を來す諸原因を、多少防ぐに足る方法と認められる。

而して、酒鼓の外用藥としては、硫黄とか、チオノールとか、イヒチオイルなどをを用ゐるのが良い。即ち、左の處方に據るものは、其例である。

處方

イヒチオイル	四〇グラム
亞鉛華	一〇〇グラム
澱粉	一〇〇グラム
グリセリン	一五〇グラム
蒸餾水	五〇〇グラム

民間の外用

右 毎夕塗布
又、古より、今に至るまで、民間に於て賞用せらるゝところのものは、次の如き處方である。

處方

タンニン酸
グリセリン

五〇グラム
一五〇グラム

右塗布

此のものは、小血管をして、多少に収縮させるところの效のあるものである。

而して、酒酸の内服薬としては、亦イヒチオールを用ゐて效のあるものである。

此他に尙ほ、キニーネ等を用ゐることあるも、其效能は、確實で無いのである。

尙ほ、酒酸に對する處置としては、食餌を注意しなくてはならぬもの

酒酸の内服

酒酸と食餌

で、彼の辛辣なる味を有する様なもの、例へば、蕃椒の類を攝つてはならぬ。而して、酒を飲む者は、先づ禁酒を斷行しなければ、到底治癒を望むことの出来ないものである。

而かも、斯く食餌に注意すると共に、消化器とか、生殖器の疾病あるに於ては、必ず之を治癒せしめなくてはならぬことは、當然の事である。

第十九項 皮膚の溢血(即ち青あざ、紫あざ)の處置

皮膚の溢血せるもの、中、美容上速かに治癒を要求するものは、壓迫とか、打撲とか、又は、衝突等に依る外傷性の紫斑である。

而して、此もの、色は、初めは、紅色を呈するも、段々と時の經るに随つて、漸く青色となるか、或は紫色を呈するものである。

此皮膚の溢血と云ふものは、時の過ぐるに随つて、自然に消え失せる

皮膚の溢血

ものであるが、其の退消作用を速ならしむることは、頗る困難な事である。然れども、幾分か効果ありと思はるゝところの方法は、次の様な手當法である。

即ち、晝間は、局部に綿紗を載せて、之にアルニカ丁幾一分、微温湯二分の混合液を點下して、絶えず湿潤を保たしめ、夜間には、三%のサリチール酸クリームを塗擦せしめ、尙ほ其上に、如何なる種のものにて、差支無いと云ふ所の、所謂無害なる、粉末劑を撒布することである。

第二十項 癩痕(即ちきずあと)の處置

癩痕、即ちきずあとと謂ふものは、皮膚の表面にあるものがあり、又、表面の下にあるものがあり、又、表面の中にあるものがあるのである。多くの、軟き癩痕は、數多く適當なる按摩を行ふと同時に、五〇〇グラムの水に、二食匙量のグリセリンを加へたる、其温グリセリン水の湿布を使用すると治し得らるゝものである。

癩痕の處置

青あざと紫あざの處置

肥大性癩痕の處置

淺き癩痕と深き癩痕の處置

又、癩痕でも、肥大性の癩痕になると云ふと、ヨード、ヨードカリ各五グラム、グリセリン一〇グラムとより成る溶液を、一日に二回刷毛にて強く塗擦し、グツタペルカ紙にて、覆ふのが良い。此方法を、三日乃至五日間行へば、褐色の厚き皮は剝れ落ちて、平かであつて滑らかな軟き癩痕が遺るが然し、右の處置を何回も繰り返して行へば、全治するものである。

又、チオデナミン一〇グラム、グリセリン二〇グラム、水一〇〇グラムとより成る溶液を、一週二回、一回に一グラム乃至二グラム宛の量を、臀筋内に注射する方法もある。

又、是等の方法以外に、尙ほ電氣分解法を行ふも良いのである。而して、淺き癩痕なるに於ては、パラフィン注入を施し、深きものには、外科的切除を爲して、後細き絹糸を以て縫合を行ふと云ふと、多少美容の目的に適ふものである。

第三章 毛髪のお化粧法

毛髪のお化粧法に、必要なる條件は、其攝生即ち養生である。

で、此の養生は、毛髪を規則正しく洗ふこと、按摩とに依つて得られるもので、毛髪を洗ふには、冷水を使用するよりも、寧ろ微温湯を使用するのが良い。

毛髪と頭を洗ふ爲めに、錢湯に於ける如く、彼の高い所から、恰も雨の降る様に、水を灌ぐのは、決して良くないことであつて、却て有害となるものである。が、然し、一週日の間に於て、入浴後、一回位之を行ふことは、大なる間違もないものであるが、是も亦、成る可くは、行はない方が良いのである。

夏の、殊に暑氣を感じる、所謂盛夏とも謂ふ時候に於て、日々、此の雨様灌水を行ひたる爲めに、強度の毛髪脱落、即ち髪が脱ける様なことを惹き起さしめたる例は、既に幾多もあるのである。

毛髪を洗ふには微温湯なるを要す

毛髪に高所より雨様灌水不可

毛髪を洗ふに適當な方

而して、毛髪を洗ひ、併せて頭を洗ふと云ふ其の度數に就ては、幾回位之を行つて然る可きか、是れは、人の見解區々であつて、固より一定すべき由もないが、我等の衛生上に於ける見地から之を云ふと、男子は、一週日に於て二回、女子は、同じく一週日に一回を必要と認めるものである。

で、其洗ふには、湯と石鹼とを使用するのは良いが、其最も良とするものは、石鹼精の使用である。而して、此の使用法は、次に述ぶる様爲すのである。

即ち、市中に販賣するところのものにて、差支はないから、石鹼精を手に入れて、其多量を頭に塗附し、微温湯を以て處置して、泡立たしめ、約五分時間其儘に爲し置くのである。斯くて、尙ほ一度擦りて、十分に洗ふ。而して、最後の處置として、清淨なる微温湯を十分に灌いで洗ひ盡すのである。

男子用と女子用の石鹼精

で、是に用ゐる石鹼精は、普通のものになると云ふと、不快の臭氣を

放つものであるが、男子にあつては、十分に之を洗うて、其れが爲めに其臭氣を除き得るも、女子にあつては、此臭氣を除き去ると云ふことは容易なものでない許りてなく、女子は、一般に此臭氣を殊に嫌ふから、我等は、女子の爲めに、特に左の處方を作製して、之を用ゐるべきことを推奨するのである。

處方

白色カリ石鹼	二分
グリセリン	一分
アルコール	一分
ベルガモット油	適宜

右洗料

他の毛髪洗剤

又、左の混合液を使用するのも良い。
 即ち、卵黄四個を取り、之に礬砂精一食匙と、カリ石鹼一〇〇グラムを加へて、能く混合せしめ、尙ほ、之に礬砂末一食匙半の量を加へて、更に能く混攪しつゝ、即ちかきませつゝ、水を加へて、其全量を一〇〇〇グラムと爲さしめたるもの。

ふけ取り剤

石鹼精を用ゐるのが良い。
 而して、女子の毛髪を洗ふ場合は、先づ髪を分けて、フランネル布を以て、前に掲げたる洗剤の泡沫を頭に塗附して、注意して擦り、後微温湯を以て、十分に洗ひ落とし、然る後に、前以て温めたる布を以て、毛髪を挟みて、乾かすのである。此場合に於て、特に速に乾かさと思はば、扇類の補けに依て、風を毛髪の間を送り込めば良いのである。
 斯様にして、毛髪を洗ひたる後は、髪に、脂肪類を塗附することが、必要である。此の脂を塗ると云ふことは、極く毛髪に有利なる條件であつて、之に反して、乾いて燥ぐと云ふことは、良くないことで、殊に、過度の乾燥と云ふことは、毛髪を折斷細裂せしめて、裂毛症と名くる病の原因を爲すものである。其故に、何うしても、髪を洗つた後には、脂

裂毛症

ポマーデは
推奨の
無しの
価値

を塗らなければならぬのである。
彼の、ポマーデ、と云ふものは、此頃我國に於ても、之をポマーデと、誤り呼んで、已に製造もせられ、發賣もせられ居る一つの化粧料であるが、元來此ものは、毛髪の尖端のみに塗るものであるから、之を男女の頭の毛、即ち毛髪に塗附すると云ふことは、已に合理で爲い許りてなく、亦、世上に在るポマーデ其ものを、實際に試験して觀ても、良質のものは、殆ど爲くして、粗悪のものが多い情況である故に、是れは、推奨すべき價値は無いものである。
そこで、毛髪の塗脂と云ふ上に於て、最も適當なる塗料は、左の處方に示すものであつて、亦是が、最も簡單に製造し得るものである。

處方

- 蓖麻子油 一分
- アルコホール 三分
- 右 臨用振蕩して用ふ

男女毛髪の
鏡當

又、頭垢、即ちふけの多い者には、左の處方に據るものを使用すれば、著しい効能のあるものである。是れは、序ながらに、附記するのである。

處方

- レゾルチン 一〇グラム
- サリチール酸 二〇グラム
- 蓖麻子油 三〇グラム
- アルコホール 一〇〇〇グラム
- ベルガモット油 適宜
- 右 塗附料

近來は、男子にも、女子にも、毛髪に灼灸、即ちこて當てを、爲す者がある様だが、此灼灸と云ふことは、毛髪が、濡れて居るときには、之を行つては、何にもならないので、却つて不可である。
又、此の鏡當には、餘り熱きものを使用するのも、宜しくないのでは

る。即ち、鍍の使用は、之を熱して、白紙を當てるも、黄色を呈しないのを度とするもので、又、其鍍を、顔に當るも、熱からずして、温かに感じる位の熱度のものを、使用するのが良いのである。

然し、焼鍍にて、毛髪を特に振り廻すのは、多少毛髪に損害を與へるものである。又、毛髪を粘着性の液にて湿すときは、特に鍍を使用しなくも、縮まらずと云ふ目的は達し得るものである。

今左に、是が目的を達し得るところの一二の處方を示せば、次の様なものである。

處方

- トラグカントゴム 二〇〇グラム
- ケルン水 六〇グラム
- 薔薇水 二〇〇〇グラム
- 右塗髪料
- 處方

男女毛髪のお化粧法

蕈麻子油 五〇グラム

グリセリン 五〇グラム

安息香丁幾 五〇グラム

アルコホール 一〇〇〇グラム

右塗髪料

男子は、二週日乃至四週日に於て、一回頭の髪を刈るべきで、刈りたる後は、髪を十分に良く洗ひ、且つ入浴することが必要である。而して脱毛、即ち毛の脱けるのを患ふる者は、毛髪を刈ることは、極めて稀であつて、常に毛髪を烈しく洗ふ男子に於て、多い様である。

次いで、毛髪第二の養生法たる按摩は、如何にして之を行へば良いか。と云ふに、男子は、日々髪を洗ふ前に、目の細かなる、即ち密なるところの櫛を以て、櫛けづり、後十分に刷毛を以て、其毛髪を摩擦すれば良いのである。

女子に於ては、男子に於けると反して、疎なる、即ち荒き櫛を以て、

髪を櫛けづるのみでなく、寧ろ毛根を押し付ける様に、頭皮の上を滑べ
 る如くに、櫛を使ふものである。尙ほ此他に、一週一回毛髪を摘む。と
 云ふことを行ふのが良いのである。其方法は、即ち、先づ兩手を擴げて、
 毛髪の中へ通し入れ、毛髪を根から指の間に挟み、さうして、引延し、
 次で毛髪を適宜の一束宛として、右手を以て其毛束の先端を持ち、左の
 手は、束のもとを握つて、之と同時に其腕を額に當て支臺にせしめ、更
 に右手にて髪を平等に引延し、次で又、指を櫛の齒に於ける様に閉ぢて、
 何回も櫛けづる様にすると云ふと、脱毛は、引抜かれるものである。此
 方法は、其行ひ方が、單に櫛を使ふ場合と異なつて居るもので、稍面倒
 なることに因て、自然手数はかゝるが、然し、此法は、櫛を使用して脱
 毛を除くの方法よりは、毛髪のためには遙に良いのである。
 そこで、此の法は、多少の面倒はあるも、多く行ひ得れば、夫れ丈、
 良いので、少し行ふ位なるに於ては、格別効驗が顯はれるものではない
 が、全く行はないものに勝るものであると云ふことは、勿論である。

時に云ふまでもない事であるが、序でながらに注意までに云ふ事は、
 櫛とか、刷毛に就ては、是等のものは、人も既に知る様に、一度之
 を使ふと云ふと、極めて不潔となるもので、兎角不淨品と成り勝のもの
 であるからして、之を使用すれば、其都度必ず使用の終りに於て、強き
 石鹼溶液の中にて、十分に洗ひ、然る後に乾かし置くと云ふのが、極く
 必要の事である。

第一項 女子の鬚髯等多毛の處置

毛が、元來有るべき處に多いのは、例之ば、頭等に於て、殊に澤山に
 あるのは、誠に美しいが、在つてはならない體部に於て、發生するのを
 見る様なものは、眞に醜いものである。殊に女子に於ての鬚髯、即ちひ
 げを生じて居る様な場合は、實に見苦しいものである。尙ほ此他に、女
 子に於て、手、足、腋の窩の多毛に苦しむ者があるのである。
 多毛は、之を剃れば、一時的の美は、固より得らるゝが、然し此の剃

毛の剃落は
 其發せし
 進せし
 却て其生
 むを促進

多毛の處置

り落すと云ふことは、後に於ては、却て毛の發生を促し進めるもので、愈々、毛を多くならしめる弊があるのである。

藥物を用ゐて、餘分にある毛を去らしめるには、左の處方通りの粉末劑を、水にて粥狀となし、之を其局部に刀背の厚さに塗り付けて、五分時間乃至十分時間、其儘にして置いて、後之を洗ひ落とすと云ふと、其目的を達し得るものである。

而して、是が爲めに、皮膚を刺戟する虞のあるときは、其洗ひ落しを爲したる後、直ぐに、其部にクリームか、ワセリンの善良なるものを薄く塗るのが良い。

處方

- | | |
|--------|--------|
| 硫化バリウム | 一〇〇グラム |
| 亞鉛華 | 五〇グラム |
| 澱粉 | 五〇グラム |
| 右塗布 | |

毛を永久的に去る手段

脱毛とレントゲン光線療法

然し、此藥劑療法を施すも、毛は再び忽ちにして生える許りでなく、以前よりも濃くなつて、美容を損する。尙ほ、此害となるのみでなく、皮膚は、刺戟せられて、是が爲めに、炎衝を起すことがあるものである。又黒色を呈する毛に、獨逸國メルク會社製造に係るペルナトロールの五%溶液を塗り付けると云ふと、毛は脱色して白くなり目立たぬ様になる。

永久的に毛を去ると云ふことは、電氣を以て、毛を分解させるのが、一番良いのである。

彼のレントゲン光線療法とか、ラヂウム療法なども試みられるが、是等は、他の皮膚病を誘發せしむる虞があるを以て、應用せぬ方が良からう。

第二項 脱毛(即ちはげの處置)

脱毛、即ちはげと云ふものは、最も頻繁に、續いて發する毛髮の病で

脱毛

男女一日の
脱毛数

あつて、同時に最も激しく美容と云ふことを損するものである。抑も毛髪と云ふものは、壽命のあるものであれば、日々毛髪の或る数が脱けとれると云ふことは、別に異常のあるものではない。

そこで、一日の間に於ける毛髪の脱ける数は、男女共に二十歳前後の者に於ては、平均六十本、三十歳前後の者に於ては、平均九十本、五十歳以後の者に於ては、平均百二十本を算すると云ふ。

病的の脱毛は、男女共に來るが、殊に男子に於て多く、恐ろしき禿頭は、殆んど男子に限られる程である。

而して、脱毛の療法としては、女子に於ては、是が比較的に偉効を奏するが、男子に於ては、其奏効が、中等度以下のことが多いのである。

で、脱毛すると云ふ、其原因は、多種なもので、随つて脱毛を患ふる者は、多数にあるのである。そこで、是が療法も亦多様である。

脱毛に處する薬剤は、彼の理髮師、美容術者の、所謂秘密薬と稱するものもあり、又、薬店に於ては、某々醫學博士處方として、廣告するも

壯年者の早
く禿頭とな
る理由

のもあるが、是等の多くのものは無効であつて、寧ろ有害となるもので、信頼すべき價値のあるものは、甚だ稀である。

そこで、現今に於ては、脱毛と云ふことを防ぎ、又、毛を生やすを促すと云ふ様な薬剤は、殆んど絶無と謂うても、決して過言でない狀況なのだ。然し、多少有効と認められるものを、各患者に對して、種々様々に適用すると云ふと、幾分其目的を達し得られることあるのは、事實である。

壯年の者にして、既に早く脱毛して、禿頭となる理由は、抑も何に由來するであらうか。

第一は、遺傳説である。是れは、頭の皮膚と、其基底たる頭蓋との解剖的關係を説くものである。

即ち、甚だしき、毛の禿けたる者にあつても、頭の側方と後頭の下方の皮膚は、其下層と移動して、皺を爲す様に、摘み上げられるが、他の禿頭部の皮膚は、其下層と移動すること、甚だ少くして、摘み上げられ

脱毛

ない。斯の如く、皮膚が下層に對して緊張すると云ふと、血液が十分に輸送されない、随つて頭皮の營養を損するのである。そこで、充血する處は、毛髪の發生と云ふことが多く、之に反して、貧血する處は、毛髪の發生少いと云ふことは、實驗上明白なる事實である。

其故に、生れながらの頭皮と、頭蓋との關係に由て、壯年者に起る禿の理由は、説明し得られるのである。然し、此頭皮と頭蓋との形狀の遺傳のみでなくして、禿頭と云ふことは起ることがあるので、彼の傳染病等に因つても、一時的の禿髪を起す様な場合はあるものにして、斯る場合は、即ち其例である。

禿髪の最大原因

はげの處置

而して、禿髪を起す原因として、其最も多きを占めるものは、前に既に述べたる所の、彼の頭の脂漏である。禿髪に對して、多數の治療藥中、比較的效あるものは、テール、レゾルチン、ピロガロール、硫黄で、其最も簡單なるテール劑は、テール

と、カカオ酪と、ラノリンの此三種の藥物から成る各等分の配合劑である。而して、世の中には、是等の藥物療法以外で、按摩法、電氣療法を推奨する者もある。

又、彼のレントゲン光線療法となると、是れは、局部の脱毛には效あるも、一般に渉る廣き脱毛には效が無いらしいものだ。

茲には、注意までに云ふが、凡て、毛髪に關する病のありしものが、治療したる後には、禿髪の豫防として、前に述べたる様な、正規の毛髪養生を守らなければならぬ。

室扶斯、梅毒、婦人生殖器病、分娩、衰弱、苦悶等の爲めに脱毛することあるは、既に人の熟知する所。是等の場合には、其原因たる障害を除けば、毛髪は、自然に再生するものなる故に、毛髪の養生と云ふことを厳守するの外、他に推奨すべきことはないのである。殊に、此の毛髪の養生は、常に之を固く守る必要のあるものだ。故に、之を實行すると云ふと、各人は、毛髪を自然に保護することにもなつて、是が爲めに、

其の幸を得るものである。蓋し、正規の毛髪攝生、即ち其養生が、如何に其美容上に關係するかを思はば、此位のことには、誰人にも容易く實行し得ることであらうと思はるゝのである。

第三項 頭垢(即ちふけ)の處置

前項の脱毛に伴ふところのものは、所謂頭垢、即ちふけである。而して、此のふけと云ふものには、全然別なるもので、相互の間に毫も關係の無き二種があるのである。

即ち、其の一は、普通に謂ふところの後の頭垢である。此のものは、乾いて居る鱗屑であつて、肩とか、背に白色様を呈して、落ちて來るもの甚だ少く、爲に毛髪を脱せしむると云ふ様なことは、殆んど無い。

此の普通の頭垢は、五乃至一〇%の硫黄軟膏の應用で、之を治せしめ

普通の頭垢
と其療法

悪性の頭垢
と其療法

得るが、其後も酒精劑の噴霧手段を以て、規則正しく洗ふのが良い。而して、此酒精劑としては、一%のレゾルチン、二%のサルチール酸を含むものが良いのである。或は、此他に、樟腦精の塗擦を賞用する。若し、是等のものに、蓖麻子油とか、或は又、芳香劑を加へんと思へば、之を適宜の量に於て、添加して差支ないものである。

次で、他の一は、脂肪を含むところの頭垢のことにして、此のものは、鱗屑は厚くして黄色を帯び、頭皮に粘着して、毛髪を脱落させるものである。

而して、此のものは、男女共にあるが、男子に於ては、女子に於けるよりも、遙かに多くあるものにして、是が治療を怠ると云ふと、速に禿髪を惹起さしむるものである。

此の最も嫌み厭ふべき、頭垢の療法は、主として、テール軟膏の應用である。

是が治したる後には、酒精劑、例へば杜松子テール、ヨード丁幾、各

毛髪精の製法

一%を含む酒精を以て、頭皮をフランネル布を以て塗擦するのが良い。然れども、此の法に據るときは、人によつて、稍刺戟性を感ずることあるから、其場合には、左の緩和なる毛髪精を使用するのが良いのである。

毛髪精の製造法

クイルラヤ皮一〇グラムを、水二〇〇グラムに加へて、全量一〇〇グラムと成るまで、之を煮沸し、其液の清澄となりたる後、其上清液を取りて、其二〇グラムに、二〇〇グラムのアルコホルを加へ、尙ほ之に、杜松子テール二グラムを加へて振盪すれば、爰に白色を呈するところの乳劑を得るものである。是の乳劑に、尙ほ二三滴のヨード丁幾を滴下せしむると云ふと、テールに有する一種の臭氣は、殆ど消え失せて了ふから、特に之に芳香を附する爲めに、二三滴の橙花油の如きものを以て、添加せしむると云ふと、此處に、芳香性の毛髪精を得るものである。杜松子テールの代りに、新しきテール劑なる、彼のアントラゾール

と呼ぶものを用ゐる者あれども、此は唯臭氣が強ばかりで、毫も效が無いものである。そこで、此新テールは、使用せぬが自他共に可からう。

第四項 生毛法(即ち毛を生す方法)

生毛法

毛髪を發生せしめる手段としては、按摩、電氣、レントゲン光線等と云ふ様なものが應用されるのである。

尙ほ此の他に、藥物にては、或は祕密藥と稱するもの、或は特效藥と稱して誇大に廣告せられるものもあるも、多くは試験的のものであつて、只徒に時と金をとを費すのみに過ぎないのである。

今の世には、眞に確かな效のあるものと、保證し得るものは絶無に歸するもので、全く無いのであるが、然し是等の誠に採るに足らないものゝ中で、稍效力のあるものと認められるものゝ中、其簡單にして、使用の便なるものは次の二種で、其用法等は、各其項下に述べる。

簡便なる毛

生毛法

即ち、一は、キナ皮の細末二〇グラムを、強酒精二〇〇グラムの中に入れて、之を三日間浸漬して滲出せしめ、此の滲出液を以て、豫め洗ひたる頭皮に塗布して、強く摩擦すること。
他の一は、五%のピロガロール、ボマーデを以て、摩擦することである。

第五項 染毛法(即ち白髪を染める方法)

毛を染めると云ふことは、其染色物を以て、毛髪の表面に沈澱を附着させることの謂ひにして、此れは、時の経過すると共に、化學的の變化を受けて、亦器械的にも擦り落さるゝものである。
そこで、此の染色と云ふことは、唯一一回許り行へば、夫れで満足すべきもので無く、絶えず何邊も繰返して、之を行ふの要があるものである。

而して、染色は、素人にて之を行ふ者あり、又家傳なりとて、之を施

す者あり、理髮業者にして、之を其副業とする者あり、専門の職業として、之を行ひ、其所得に依つて、衣食生活する者も亦在るのである。

而して、醫師の如きは、之に對して、全然に無關係の有様であるが、或は粗悪なる薬物を用ひ、或は拙劣なる技術に依つて行はるゝところの染毛は、實に有害であると謂ふ可しである。

毛髪を染める手段は、世に既に澤山あるも、多くは、之に用ゐるところの薬物、有害なるものにして、是が爲めに、採用するに足る様なものは、殆んど絶無であると言つても、過言で無い位の状況である。従つて、染毛薬の善良なるものは現世に尙未だ無いのである。

毛髪を鮮かなる、所謂黄金色に染めるには、一〇乃至二〇%の過酸化水素液を用ゐるが、是れは、決して無害のものとは言へないのである。即ち、永く之を用ゐるときは、却つて毛髪をして、其固有なる色を脱せしむる許りでなく、脱毛を招ぐことあるが故である。

近時は、無害の染毛劑として、オイガトールなるもの、發賣せらるゝ

様になつたが、是れは、衛生上に適するものであるとして、賞賛されて居る。

最も使用上の便で、最も好い染毛料は、硝酸銀である。即ち、毛髪を豫め二%の曹達溶液を以て脂肪を去らしめ置き、乾燥せしめたる後、媒染剤として、齒刷毛を以て、二%の没食子酸溶液を塗布し、五分時間其儘と爲し置いて、其後他の刷毛を以て、前の硝酸銀溶液を塗布せしめること十分時間に至ると云ふと、其目的を達し得るものである。

此法にして、若し、毛髪に斑點を生じたるときは、三〇%のヨード加里溶液を以て、之を拭ふと云ふと、其斑點を消え失せしめることを得るものである。而して、右の染料として用ゐる硝酸銀溶液は随意の稠度のものを用ゐて差支はないが、左記の處方に據るものを使用するのが、最も好いのである。

處方
硝酸銀

二・五グラム

苛性アンモニア水

七・五グラム

蒸餾水

三二・〇グラム

右染料毛料

第四章 美容法(即ち容姿をよくする方法)

顔の容は、元來が、持つて生れたものにて、之を變へ得ることは、少いので、殆んど出来ないと言つても、差支は無位である。さりながら、顔の中に在る、鼻の容、即ち其かたちは、比較的改良し易いものである。

鼻の醜い形貌を呈するものに、四種の區別がある。即ち、左の如きものである。

- (一) 鼻の尖が、鼻正中線より、一方に曲りたるもの、
- (二) 鼻梁の缺けたる鼻、假へば、梅毒に於ける、鞍鼻の様なもの、
- (三) 鼻梁線無く、其代りに幅廣くして、側方に曲れる鼻梁を有する

鼻の四種

パラフィン
の注入

鼻、
鼻翼不作法にして、鼻孔は大に、壓しつけられたる鼻、
以上、四種の中、前二者は、梅毒の鞍鼻を除けば、他は、健康者に見
えるもので、後の二者は、梅毒、或は佝僂病を経過したる徴である。
是等の鼻は、パラフィンの皮下注入に依て、醜くからざる鼻に改める
ことが出来るのである。

顔の皺

て、此パラフィン注入は、其の操作即ちてだては、容易なものでは無
いが、然し熟練せる醫師に就て求むると云ふと、殆ど、何等の危険も無
くして、望みを満たし得る様な容が得られるのである。
右に述べた様に、此の方法に據ると云ふと、癍痕も治し得るが、顔に
於ての皺も亦、此パラフィン、或はパラフィンと油類との混合物を注入
して良結果を得るものである。

頬の窪み

頬の窪めるものは、按摩にて、又鼻、耳の大なる、唇の厚き等は、
之に相當の外科的手術を施して、多少見よくし得るものである。

頸の美容

頸の不恰好で、皺の多くあるものは、主として、頸の姿勢が、悪いか
らである。

頸の容を良くするには、次の方法を行はなければならぬ。

(一) 頸を、稍々後に曲げて、肩を低くして後方へ引き、深呼吸を爲
すこと、

(二) 胸部の按摩、

(三) 頭を強く前へ曲げ、次で後へ延ばし、其儘にて左右へ廻すこと、

全身の美容

以上の、四項を何遍となく、繰返して行ふを可とするのである。
次で、全身の容姿を改良したい、と苦心する者は、勿論多からうが、
是れは、甚だ困難なことであつて、多くは徒勞に了るものである。

そこで、肥え過ぎたる者が、内服薬にて痩せるとか、吹聴して居る者
もある様な世の中であるが、然し、是等の薬劑で以て肥えたる者が、果
して瘦るかは、大なる疑問である。

世人は、藥物、是れ毒物であると云ふことを忘れてはならない。

裸體美と外形美

巧妙なる廣告手段に、誘惑されて高價を拂ひ、さうして、斯様な藥劑を服用するよりも、寧ろ各人の嗜好むところの、何かうまいものを、食ふ方が、遙かに有利である。

序ながらに云ふが、前に述べたる様に、裸體美、即ちはだか美と云ふことは、要求に應じて直に供給することは、不可能なる事であるが、裸體ならざる容色の美は、衣服、帯の模様、縞柄、色合、其仕立方、衣服の着こなし方、帯の結び方、又髪の方、又髪の方、又髪の方、帽子の形と色、履物の高低、等に左右されることが多いから、是等のものに就ての取捨選擇と云ふことを等閑に附してはならない。

第五章 肌の美色法

(即ち色艶をよくする方法)

肌の色艶、即ち血色は、皮膚の營養状態と、皮膚の分泌物、殊に脂肪の多少と、皮膚表面の色とに關係して來るものであるから、例へば、真

料色艶と化粧

白なる肌は、薄く紅色の透き通る様な色艶を理想として、斯くありたしと如何に熱望するも、直ちに満足を得ることは難い事である。

皮膚は、全身の状態に關係するものなれば、夫れに顯はれる色艶は、亦全身の状態に關係するもので、苦悶、憂鬱、衰弱等は、皮膚其のものよりも、色艶に大なる影響を及ぼすものである。

そこで、色艶を良くするには、先づ冷き軟水、即ち手近く容易く得られるところの、冷き煮沸水と、米糠、或は善良なる洗粉とを使用するを適當とする。扁桃糖とて、扁桃を壓搾して、其油を製造する際に、其残留する成分より造りたる一種の糠がある。又、小麦粉に、扁桃油を加へたるものがある。是等のものは、米より得たる糠と同様に使用せらるゝものである。

乾燥して、軟かならざる厚き皮膚、即ち厚き角質層を有する皮膚の者は、一と二との比例に成る、カリと、グリセリンの混合物なる、所謂流動石鹼と云ふものを使用するを合理とする。

色艶と脂漏
及瘡瘡

色艶と覆面
の效用

覆面は褐色
のもの最も
適當也

是れは又、何故かと云へば、蓋し、カリと云ふものは、角質を溶解し、グリセリンは、濕氣を引いて、皮膚を柔軟とならしめるからである。脂漏とか、瘡瘡などを有する者は、先づ是等に對する適當の療法を施すべきである。即ち是等のものを、先づ第一に治癒せしめて置かなければ、如何に、色艶を良くしようとの間に苦心努力するも、到底満足を得らるべきもので無いからである。

良く發揮して居る色艶を、愛し護る爲めには、其有效なるものは、覆面の使用である。此覆面は、日光とか、風、又塵埃等を避け得るものであるからだ。此ものは、寒冷を防ぎ得るものではない。そこで、冬季に於ては、寧ろ、之を使用せざるを可とするものである。

而して、覆面の色は、褐色のものを以て最も適當とするが、多くの女性は、好んで、其淡紅のもの、淡黄のもの、白色のものを選んで、褐色を忌避するであらう。然し、是れは大變な間違ひ事である。

で、色艶の保護料として、使用するべきものは、所謂クリームである。

寒冷の空氣
とクリーム

此クリームは、皮膚を洗ひたる後に於て、其少量を塗擦するので、若し過剰分あるに於ては、絹布を以て之を拭ひ去るのが良い。

顔を洗ひたる儘とか、濕りたる顔で、直ぐ戶外に出ることは、極く良くない。何故かと云へば、寒冷の空氣に觸れると云ふと、皮膚を害し、随つて色艶を損するからである。

そこで、戶外に出るときは、風とか、寒冷な空氣とかの有害となるものを、避ける手段として、此のクリームを塗擦して、外出すると云ふと、全く是等による害を避け得るものであるから、斯くするのが良いのである。

脂肪多くして、膩ざりたる顔の者は、屢々洗うて、既に述べたところの酒精劑を用ゐるべきであるが、其皮膚若し感じ易いに於ては、夜石鹼の善良なるものを使用して洗顔し、次でグリセリンクリームを塗擦して、其翌朝に於て、一のサリチール酸アルコールを以て、之を洗ひ落とすことを推し奨めるのである。

日光に因る
害を防ぐ手
段

色艶と按摩

次いで、強烈なる日光に因る害を防ぐには、一%の硫酸キニーネクリームを以てするか、或は〇五%のカルタミンにて、赤色に色を着けたるクリームを使用するのが良い。

硫黄とか、レゾルチンを含むところのクリームは、或る場合に於ては有効であるが、之を永く用ゐると云ふと、却て、所期に反する結果を齎すことあるものであるから、之を使用するときは、餘程注意しなくばならぬ。寧ろ、此のものは使用しないのが良いのである。

按摩は、色艶を良くする上に多少効果がある。是は、何故かと云へば、蓋し、全皮膚の新陳代謝を旺ならしめ、是が爲めに皮膚の官能をよく發揮せしめて、其性質を改良せしむるからである。

之を要するに、肌の色艶の美は、皮膚の美にあるもので、皮膚の美は身體に於ける心身の健康に歸するものなることを忘れてはならぬ。そこで、此れさへ忘れぬに於ては、肌の美を保つて、色艶を良くならしめ得るものである。

第六章 手足のお化粧法

手足の美も、其一方は容に、其一方は皮膚に關するものであるが、茲には、皮膚のことに就て述べる。

手と足の美を保存するには、極めて熱き、又甚だ冷き温度を避けなければならぬ。又、熱きより俄に冷きに、或は、冷きより急に熱きに移すことも不可である。

そこで、戶外に於ては、必ず手袋とか、足袋を穿つ要のあるものである。さりながら、是等のものは、毛製のものを、使用してはならない。そは、何故かと云へば、皮膚を荒すことがあるからである。

是より以下は、先づ手の養生法を説いて行かう。而して、足のことに就ては、之を別に述べぬ。何故に之を述べぬかと云へば、手のことを知れば、足のことも是と同じ様なものであるから、即ち、之に准ずれば良いからだ。

手足の養生

手足のお化粧法

即ち、手の養生と云ふことは、洗滌、即ち洗ふこと、塗脂、即ち脂を塗ること、とに依るもので、粗きひびのある手は、多くは不良なる石鹼を使用することから来るものである。

不良なる石鹼は之を使用すると云ふと、皮膚の炎衝を惹き起さしめて、自己の業をとることも出来ない様に、なることもあるから、殊に注意をしないでほならぬ。

手を屢洗ふべき必要のある者は、洗ひたる後は、必ず塗脂をせねばならぬものである。塗脂をせぬと云ふと、多くの場合に於て、ひびは、容赦なく出来るものである。

此の塗脂を行ふ方法に、三つの種類があるもので、孰れも、推奨するに足るものであるから、各人の好みに應じて選び行ふのが良いのである。即ち、

第一は、最も簡便なものである。
先づ手を洗うて、濕潤せるところに、白色のワゼリンを塗擦して、乾

塗脂の三種

かすのである。

第二は、是は、稍々煩はしきも、施した後は、大變に心地良いものである。

即ち、洗うて乾かしたる手に、レニエンス軟膏、一名金クリームと呼ぶ軟膏を塗擦して、後石鹼精を手掌に取り、前に塗つてある金クリームと共に、摩擦して、此處に泡立たしめ、全く水を使用せず、即ち洗ふことなしに、其泡沫を布片にて拭ひ取つて、乾かすのである。

第三は、グリセリンを使用するものであるが、決して單純のものを使用してはならぬ。即ち、左の通りに、一種の混合液を製して、之を乾ききらざる、即ち濕潤せる手に塗擦するのである。

處方

- オレーフ油
- 黄色ワゼリン

ラノリン
グリセリン
右塗擦料

各等分量

硫黄エーテル 一〇〇グラム
 ホフマン氏液 一〇〇グラム
 アルコホルル 一〇〇グラム
 グリセリン 一〇〇グラム
 右塗擦料

右の二處方中、後者は、佳香を放つものであるから、不快の臭氣を發する、多汗の手に使用すると云ふと、殊に妙である。尙ほ之許りてなく、此ものは、ひびとか、あかぎれに對しては、速かに效を奏するものである。而して、手を洗ひたる後に於て、其手を軟かにするには、グリセリン

軟膏を塗布するか、或は、グリセリンに、トラガカントゴムと、澱粉を加へ、之に水を少量加へて、良く混合せしめたるものを使用するのも良い。又他の方法としては、左の處方通りの塗擦料を使用するのも亦良いのである。

處方

グラチン 五〇グラム
 蜂蜜 二〇〇グラム
 グリセリン 一二〇〇グラム
 蒸餾水 五五〇グラム
 右塗擦料

第一項 凍傷凍瘡(即ちしもやけの處置)

凍傷、即ちしもやけは、其症候に據つて、之を三度に區別されるものであるが、美容上に、説くべき要のあるものは、第一度の凍傷、即ち紅

紅斑性凍傷

斑性凍傷と、凍瘡とである。
紅斑性凍傷とは、皮膚が、一時寒冷に觸れるとき、初めて貧血し、次で充血し、寒冷の加はるに従ひて、遂に鬱血したるもので、瘙痒と灼熱の感じを伴ふものである。

此凍傷は、自然に委して居つても、或は又治療に依て消え失せることあるものであるが、時とすると、鬱血が、其儘に残りて暗紅色を呈し、皮膚は、浮腫、即ち腫れ上ることがある。此の状態を、特に凍瘡と呼ぶものである。

而して、凍瘡は、人の熟知して居る様に、かゆさを感じることに、甚だしいもので、殊に夜寢床に就て温まるときに、劇しくかゆみを増して來るものである。

て、此のものゝ、發生するところは、指趾、即ち手の指と、足の趾の側背面、手の甲、足背、足の縁、耳朶及び鼻尖、等である。是等は冬季に於て發し、氣候温暖となれば、消え失せて、多くは寒冷の期節に、再

凍瘡の豫防

び發して來るものである。而して、之に侵される者は、男女の幼少年に於て多い様である。

凍瘡の豫防手段としては、腺病質、貧血等を治すことが肝要である。即ち是が爲めに、肝油とか、亞砒酸、鐵劑等を内服し、海水浴等を爲し、寒冷の候となれば、手袋、足袋を使用して、皮膚を保護し、温度の急變を避けて、朝夕約五分時間宛、熱き湯を以て局處浴を行ひ、ベルツ水の常用を可とするのである。

紅斑凍傷の處置

而して、紅斑性凍傷に於ける處置としては、之を熱き湯にて洗ひ、局部に酒、醋、アルコール、樟腦精、等の塗布、又硼酸水、明礬水、等の冷罨法を施すのが良いのである。

然れども、是等の療法が、若し效無くして、凍瘡を生ずれば、治療は困難である。

凍瘡に對する藥物は、其種類頗る多數にあるも、特效薬と稱すべきものは、一つも無い。今左に、試用すべき價值のあるもの數種を擧げて見

よう。

處方

ヨード丁幾
右塗布料

適量

處方

純ヨード

〇・二グラム

コロチウム
右塗布料

二〇〇グラム

處方

イヒチオール

二〇グラム

レゾルチン

二〇グラム

蒸餾水
右塗布料

一〇〇グラム

處方

樟腦

一〇〇グラム

右混和塗布

九〇〇グラム

處方

ヨード丁幾

二〇グラム

石炭酸

一〇グラム

タンニン酸
右塗擦料

二〇グラム

處方

炭酸クレオソート

一〇グラム

樟腦
ペルバルサム

一〇グラム

膿潰せる凍瘡の處置

而して、凍瘡の膿潰、即ちつぶれて、膿汁の出る様なものには、左の軟膏を用ゐるのが良い。

黄色ワゼリン

五〇〇グラム

右塗擦料

處方

一〇% デルマトール軟膏

適量

右貼用

處方

一〇% イヒチオール軟膏

適量

右貼用

處方

硝酸銀

〇・二—一〇

ペルバルサム

一〇—三〇

單軟膏

五〇〇グラム

右貼用

又、凍瘡に、電氣療法を應用することもあるから、之を使用する者も在るのである。

第二項 爪のお化粧法

爪の容と其厚さは、生れながらであるから、之を改めると云ふことは、到底出来難いが、其他の點は、養生に依つて、美を發揮せしめることが出来る。

爪と云ふものは、之を能く見ると云ふと、其人が如何なる職業の者であるかを言ひ當て得ると云ふ程のものであるから、爪も相應に養生する必要がある。

そこで、此ものは、鋭い鋏を以て、角の無き様、圓く剪り、爪の尖きの圓みは、指趾の尖端の圓みに、平行しなければならぬものである。

故に、餘り短く剪ると云ふことも、亦之を延ばし過ぎるのも宜しくない。爪の尖の皮膚に着かぬ部分の下は、常に清潔に爲し置くべきは、勿論のことである。

又、爪に、横爪と云ふものあらば、注意して之を剪り取らなくてはならぬ。

世の中には、爪を噛む癖を有つ者があるので、是は、大人に於ては、殆んど見受けられないけれど、小兒か若しくはそれより、少し年齢を重ねた者に於て、能く見受ける所で、他より之を見るときは、誠に見にく、ある許りでなく、噛んだ爪其ものは、必ず容を損ずるものであるから、その小兒の知らざる間に、毎朝キナ丁幾の様な、苦味を呈する無害の薬物を、塗り付け置くと云ふと、多くの場合に爪を噛むことを止める様になるものである。

爪を磨きて、光澤を發揮せしむる手段としては、酸化錫を、滑石などと混じて、之を以て其面を磨擦するにあれど、最も簡單なる方は、鹿の

小兒の爪噛むを防ぐ手段

爪に光澤を發せしむる手段

爪の白點

硬質の爪の手當

棘皮、即ちなめし皮にて摩擦するのである。

爪には、往々白點を生ずるものであるが、之は、特に手當するの要なきものである。それ故に、自然に委して置いて、毫も差支のあるものではないものである。即ち、爪の延びると共に、自ら消え失せるものであるから、特に手當を施すの要はないのである。

蓋し、爪は、四ヶ月内には、其根元より尖端まで、成長するの能力を有つて居るものである。

爪には、異常に硬きものあり、又軟きものあり、其硬き質のものは、屢々温浴を試みて、左の處方通りの薬物を鹿皮を以て塗擦すれば、之を軟かなる質と爲し得るものである。

處方

滑石

三〇グラム

苛性アンモニア水

三〇グラム

甘扁桃油

三〇〇グラム

爪のお化粧法

軟質の爪の手當

又、其軟き質のものには、左の處方に據る藥劑を塗擦すると云ふと、之を程よき度の硬き爪と爲し得るものである。

處方

酒石酸

一〇〇グラム

ミルラ丁幾

一〇〇グラム

アルコホール

二〇〇グラム

蒸餾水

二〇〇グラム

右塗布料

逆爪と稱するものは、疼痛あつて、其周圍に炎衝を惹き起すことあるを以て、之に注意を拂はなくてはならぬ。之れに對しては、ゴム絆創膏の貼用は、最も至便とするところである。

第七章

口の養生とお化粧法

口の養生が、口腔科學の發達に伴れて、近頃は大に意を注ぐ様になつて来たことは、洵に喜ぶべき現象であると謂はねばならぬ。

唇の容の醜きものは、手術に依て、多少之を美しくならしめ得ることもある。

彼の多くある細き薄き唇は、化粧料を塗布して、之を厚く見せることが出来るもので、廣き厚き唇も、亦之と同じ方法を以て、薄く且つ小さく見せることが出来る。

塗唇料

紅色の塗唇料は、最上のカルミンと純流動アンモニア各一〇グラムを、蒸餾水の二〇乃至五〇グラムに溶解せしめ、自己の欲する程度の色度になしたるものもある。又、紅草と稱する植物より、餅べにを製して、之より更に、此の塗唇料を製するものもある。で、此の植物性のもの、製法を、詳しく知らんとする者は、宜しく拙著『我家の化粧品』に就て、其條下を見らるゝのが良からう。

唇の手當

唇の皮が、ひけたり、又われたりするには、夜間に於て、脂肪を塗

るのが良い。之には、クリームか、或は、ワゼリンを使用すれば良いのである。然し、之よりは、一歩進んで、左の處方に據る塗唇膏を使用すべきである。

處方

- 硼酸 三〇グラム
- カルミン 〇一グラム
- 白蠟 一〇〇グラム
- 鯨蠟 一〇〇グラム
- 扁桃油 一〇〇グラム

右塗唇料

是等の塗唇料には、殊にアルコール性の芳香劑を添加せざるが良いのである。又、アルコール性のものでなくとも、成る可くは、芳香劑を加へないが良い。何んとなれば、芳香劑は、多くの場合に唇を刺戟して、是が爲めに、發疹を來す虞があるからである。

次で、唇に、寒冒とか、胃の障害とか、熱性病、等に原因して、小なる水泡を生じたるときは、特に手當を施さずして、自然の治癒を待つか、或は無害なる粉末劑を撒布するか、或は又、左の處方に據る藥液を塗布するのが、最も良いのである。

處方

- 重硼酸曹達 五〇グラム
- グリセリン 一五〇グラム
- 蒸餾水 一五〇グラム

右塗布料

又、唇に濕疹を生じたときは、軟膏劑を使用せずして、グリセリンか、或は左の處方に據る藥液を塗布すべきである。

處方

- 無色ヨード丁幾 一〇一五〇グラム
- グリセリン 一〇〇グラム

右塗布料

又、人によると、常に唇を噛む者があるが、之は禁じなくてはならぬ。そは、何故かと云へば、常に唇を噛むと云ふと、荒す基となるからである。

齒は、其色白くして、齒列に隙間なきを要する。隙間ある者は、宜しく齒科醫に就て、其隙間を充填するの要あるものである。

而も、齒の養生と云ふことに就ては、人の既に熟知する所、即ち齒磨

刷毛を以て、齒の内外面と噛む面とを、或は縦に、或は横に摩擦して、

常に清潔に保持しなくばならぬ。是が目的を達する爲めには、一日に

少くとも朝一回、若し行ひ得るならば、夜寢床に就く前に於て、更に一

回之を行ふを可とするのである。

齒磨粉に用ゐる藥物は多種あるも、就中口腔、即ち口内と、齒の爲め

に最も良きものは、クロール酸カリウムである。此が詳細に就ては、拙

著『我家の化粧品』を参照せられたいのである。

齒

又、食事を爲したる後は、小楊枝を使用して、口腔を水にて含嗽するを可とする。

口中の含嗽料には、薄荷油等の揮發性油類を以て、芳香を附したるものもあるも、是等のもは、口唇の粘膜に觸ると云ふと、有害なるを以て、之を使用せざるの爲である。

人若し、口腔の含嗽に、防腐藥の配合されたるものを欲するならば、

一小刀尖量のクロールナトリウム、即ち食鹽か、或はチモール一小片を、

一盞の水に投じて、斯くして得たる溶液を、含嗽水に滴加すれば良いの

で、尙ほ之に、芳香のあるのを望むならば、チモール一グラム、安息香

酸二グラム、オイカリプトール三グラムを、一〇〇グラムのアルコール

ルに加へ、斯くして得たる溶液の一二滴を、含嗽水に加へるのが良い。

又、感じ易き状態にある齒齦、即ち齒ぶきには、ラタニア丁幾、ミル

ラ丁幾等分より成るものを、其齒齦に塗附するのが良い。

口中は、時として異臭を放つことがある。又實際に於て、これは、多

口中の手當

く人にあること、此場合には、齲齒、即ち、虫歯とか、胃病とか、鼻咽喉頭の疾病に注意して、夫れく適應する治療を行ふべきであるが、其口中の臭きを除くに、最も良なる者は、三%のペリヒドール水である。茲に改めて云ふまでもなく、口と云ふものは、屢々種々なる疾病の入口となるもので、即ち多くの病毒は、口より體內に侵入するものであるから、此理由に基いて、口の養生と云ふことは、それ等の疾病に對して戦ふ一の手段であつて、健康、之を延いては美容を保持する上に於て、頗る重きをなすものである。

そこで、口の養生と云ふことは、一時も之を怠つてはならぬのである。

第八章 美容按摩(即ち化粧マツサージ)

美容按摩と云ふものは、乾いて燥いで、弛緩んで居る皮膚の營養を高めて、皺襞、即ちしわを除き、滑澤ならしめること、又或る窪める體部に、脂肪を集め來りて、其くぼみを填め、或る體部に有り餘つて居る

按摩の目的

按摩を施す期間

ところの脂肪を、他に運び去ること、等を目的とするものである。そこで、此目的を知りて、按摩を適度に施すと云ふと、多少の效果を得らるるものである。

美容按摩は、多くは日々、或は數日間連續して行はざれば、無益となる許りでなく、却て有害となる故に、是の按摩の適用を求むる者は、耐忍を要するものである。然らざれば、唯顔の一部を撫でらるゝ位に過ぎないものだから、斯くなる様ならば、寧ろ初めから求めないのに如くはないのである。

次で、美容上に最も重要視せらるゝところの一般の顔面按摩は、己れ自身には行ふことが出来ないもので、其效果を認むる爲めには、六週日の間、毎日少くも十五分時間から、三十分時間之を行はなければならぬものである。

既に、人の熟知する様に、按摩は美容の目的以外に、種々なる疾病に適用せられて、奏效するものであるが、或る醫師は、顔面按摩は、治療

按摩を施す
上の注意

美顔術者の
弊風

上の效無しと説き。或る醫師は、一年以上種々なる治療に對して、抵抗したるところの顔面發疹が、數週間毎日の按摩に依て、全治したと云うた者もある。

すべて、按摩すべき皮膚には、脂肪を塗る必要は無いものである。然し、乾いて脆くなつて居る皮膚には、按摩を施す者の手に、僅かの量のワセリンを塗つて行へば良いので、之を受ける者には、塗る必要が無いのである。

又、按摩を施す者が、若し其手を洗ひたるときは、濡れたる手へ、ワセリンを塗つて拭ふ様にしなければならぬ。

又按摩を行ふ前後には、按摩すべき皮膚を、アルコールとか、エーテルとか、或は又、ベンゼンを以て拭ふ要があるのである。

按摩を施すには、手を以てすれば足るものである。然るを美容按摩を行ふものは、化粧品濫造者の悪例に倣うてか、數多き無用なる器械を備へ、之を按摩に必要缺くことの出来ないものと稱し、尙ほ其上に、諸種

の化粧品の請賣を爲して、高價なる報酬を貪り取らんことに苦心して居るのである。

而して、是等の按摩器械の中、振動按摩器、吸引按摩器は、熟練せる術者が之を使用すると云ふと比較的有效であるが、此他の按摩棒とか、篋とか、鏡などの器械は、全く使用の目的無き無意味のもので、まるで、玩具に等しいものである。

所謂、美顔術を行ふ者が、是等玩具に等しきものを以て、苦痛が彫み込まれたる顔の皺は、決して滑らかにされるもので無いのである。知らずとは云へ、之に對して高價を拂ふ者が、現今數多きことは、實に奇觀と云ふべきものである。

或る樂器の一つの音調が、其れのみには、快く響かないでも、他の音調と互ひに調和すると云ふと、眞に心地よく響くところの音調と成るが、眞面目なる美顔術を行ふ按摩者の手には、なでる、こする、もむ、こねる、たたく等の箇々の按摩術が、巧妙に融合されて、初めて、其效

力ある按摩を施し得るものなることを、世の人は、忘れてはならぬ。之を要するに、合理なところの美容按摩、一名化粧品マッサージは、質の善良なる化粧品と相俟つて、美容を求むるに、必要なものと信ずるのである。

第九章 妊娠と美容法

現代女子に於ける美容上の謬見

妊娠と飲食物

妊娠は、女性の一生中にある通例なることである。然れども、是が異常の経過をとりて、疾病の原因をなすこともある。が併し、現代の女の様に、妊娠に繼いで分娩を以て、美容を全然に破壊し去るものと、心得居ることは、謬まれるの甚だしいものである。妊娠の間は、顔に生ずる褐色の斑點、又、分娩後に於て現はれる脱毛、等に就ては、既に述べたる所。妊娠せる間、美容上に特に注意を要する種々なる點は、第一に、食物を十分に攝取することである。

妊娠と運動の養生

然し、此攝取上、避けべきことは、脂肪の多きもので、是は、成る可く攝らぬ方がよいのである。又、流動物を、多量に取ることも避けなければならぬ。又、茶、珈琲、麥酒、其他の酒類や、尙ほ菓子類も制限する必要があるものである。第二には、運動を十分に行ふ要があるのである。即ち散歩、家内の仕事、過激ならざる體操、等を爲すべきことである。第三には、總て、皮膚の養生と云ふことに注意を拂ひ、隔日或は毎日温浴を輕くなし、適當なる按摩を施し、皮膚の弾力性を高め、以て美容を維持し、且つ下腹等の妊娠癍痕を避くることである。

第十章 美容料(即ち化粧品)

近時、美容法進歩したる結果、美容に關する數多の書籍は出版せられ、其載つて居る化粧品は、其數擧げて算ふることの出来ない位の多數で、美容を欲する者の爲めには、便利此上も無いことであるが、然し記載す

るところの記事其ものは、多くは杜撰極まるもので、多大の希望は、忽ちにして消え失せる様になるのは、實に遺憾に堪へないのである。

即ち、一の疾病に對して、美容上效ありと稱する藥物の数の多いことは、畢竟、特效藥と稱するもの、無きことを意味するものである。

彼のキニーネは、マラリヤの特效藥なる故に、マラリヤに對しては、キニーネ以外に之を推奨すべきものは無い。

是と同じ理で、同じ目的を有する化粧品が、數多くあると云ふことは、其中如何なるものが、眞に其目的に適ふものなるか。此處大に判斷に苦ましむるものであると謂はねばならない。

畢竟、特に、賞賛するの價値ある化粧品は、一つも無いと云ふことに歸着するより外にないことである。

特效藥は無くとも、疾病に對しては、勿論藥物を處方し、又投藥もしなければならぬ。そこで、特效ある化粧品は無くとも、美容と云ふことに對しては、必ず化粧品を使用する要があるのである。

而して、其化粧品は、敢て斬新なるものとか、又奇抜なものとかを選ぶには及ばないものである。然るに多くの人は只徒に新規なるものを競うて、之に高價を拂ひ、其效能の未だ知られざるにも拘はらず、所謂新しい物、高い物、として矜るけれども、是は亦大變なる誤りであつて、實に憫笑すべきことである。

そも、素人は、固より化粧品の何を含めるかを知らずに居る者であるから、白色のものを紅色等に着色するか、或は其成分の各分量を僅かに變更すると云ふと、其效力は舊のものに優るかの様にか考へる様であるが、是も亦誤解なるものである。

化粧品を發賣するには、廣告が大切である。そこで、廣告に金を費して、巧妙にさへ吹聴させれば、如何なる劣等品でも賣れる世の中だ。とは、化粧品製造業者の、臆面もなく常に明言する所であつて見れば、最早疑ひをはさむ餘地の無いもので、蓋し是が現代に於ける化粧品の真相だらう。

斯る奇なる現象は、正しく廣告手段の巧拙如何に因ることであつて、當に廣告の威力とても謂ふべきところだらう。

斯の様に、販賣せらるゝ化粧品を購ふ者は、眞の化粧品を求むる人とは云へない。随つて、亦美容を望む者では無いと謂ひ得るだらう。

斯くなつては、之を需要する者は、寧ろ製造業者に、其廣告費を而も高價に拂ひ出し居ると同時に、是が營業者の暴慾を充たす一種の慈善者に過ぎない様になつて來る。然らば何處に、是等の慈善の者が居るか。

是は、宜しく各人の胸中に問ふべきことで、我等は、是を茲に明言するの勇を有しない者である。

又、化粧品に付けられたる佳香、化粧品の包装、容器の美觀等は、其化粧品の本質に、何等の關係を有して居らぬもので、多少の關係ありとせば、總て外觀の美は、實質の粗惡なるものであると云ふことを、忘れてはならぬ。

化粧品としてのクリームは、塗脂上に必要なるものである。而して、

クリームの處方例

此のクリームなる名稱は、第二章以後の各其條下に擧げたが、之を製するに必要な二三の處方を示せば、實に左の様なるものを謂ふのである。

處方

(第一例)

- 鯨 腦 四〇グラム
- 扁桃油 八〇グラム
- 蓖麻子油 三〇〇グラム
- 右 クリーム

(第二例)

- カカオ 酪 四〇グラム
- 白 蠟 二〇グラム
- 扁桃油 三〇〇グラム
- 右 クリーム

我國産クリーミングは殆んど呼ぶ資格も無いもの也

クリームと稱するものは、實に右に掲げたる處方通りのものであるが、

我國に於て製造せられたる各種のクリームは、名稱は之をクリームと云うて發賣せられ居るも、之を分析試験に附して観ると云ふと、不思議にも、右に示した如き成分のものは殆んど無いので、つまるところは、クリームと謂ふ資格の無いものに、クリームと名付けて發賣し居るものである。是も亦、實に奇觀であると謂ふべきである。

諸種の化粧品に就ては、勿論之が良否を鑑別するの要あるもの、即ち品を大に選擇すると云ふ必要のあるものである。そこで、是等の事は固より、尙ほ是等の化粧品を、家庭的に容易く、何人の家に於ても製造し得る様に書いてあるものは、即ち『我家の化粧品』と呼ぶ書物である。

我等は、既に、是等化粧品の中に就ては、其全般を詳細に、拙著なる右の書中に記載しあれば、茲には、是に就て説明することは、省略することとした。

人若し、化粧品の最も善良なるものを、最も廉價にして容易く之を得んと思へば、前掲せる『我家の化粧品』を精讀せらるべきものである。

内服美容料

ホーレル水

世の各人各家は、蓋し右の書物に據て、自家に於て之を應用すれば、極めて幸福を得らるゝものである。

而して、内服美容料、所謂飲んで美しくなる所の秘薬と稱するもの、主成分は、亞砒酸である。

此の亞砒酸は、一方に皮下の脂肪を増さしめ、皮膚を滑らかにし、毛髮に光澤を與へる作用を有つと同時に、他の一方は、心臓の動作を高め、血液の成分を良くする等の効能を有つものである。

亞砒酸は、斯の如き効能のあるものなれども、此ものは、猛毒に屬するものであるから、素人は、直ちに之を服用してはならぬもので、必ず醫師の處方を請うて、其監督の下に服用しなくてはならぬものである。

又、此もの、服用の結果は、餘りに之を期待してはならぬ。

而して、亞砒酸剤の中で、其有名なるものは、亞細亞丸と稱するものにして、所謂砒鐵丸と呼ぶものであるが、ホーレル水と稱する亞砒酸カリウム液も亦用ゐらるゝものである。今、是等の處方を舉ぐれば、實に、

次の様なものである。

處法

亞砒酸

〇〇五グラム

黒椒末

五〇〇グラム

アラビアゴム

一〇〇グラム

蒸餾水

適宜

右 亞細亞丸百粒と爲し、毎食後一丸宛内服

此丸は、最初の服用量は、一日三丸なるも、漸次に之を増量して、一日に十五丸乃至三十九丸を服用すべきものである。

處法

亞砒酸

〇〇二グラム

硫酸鐵

〇五〇グラム

重炭酸ナトリウム

五〇〇グラム

ホミカ越幾斯

〇五〇グラム

ゲンチアナ末

適宜

ゲンチアナ越幾斯

適宜

右 砒鐵丸百粒を製し、毎食後一丸宛内服

此のものも、亦漸次に増量して、一日に、十五丸乃至三十九丸を服用すべきものである。

處方

ホーレル水

一〇〇グラム

ホミカ丁幾

一〇〇グラム

茴香水

一〇〇グラム

右 毎食後一滴宛白湯に和して内服

此のものも亦漸次量を増して、一回十滴に至るものである。

第十一章 結論

古より、今の世に至るまで、歡樂の都に於ては勿論、又如何に貧し

容姿の美を望むは當然也

き鄙に於ても、美容、即ち化粧の顧みられなかつたことは、唯の一時も無い。

人には、特に美容の意志は無くとも、自然に常に多少の美容を行つて居るものである。

男女共、相互の間、殊に異性から、其容姿の美と云ふことは、求められるものである。そこで、其需要に應じて、供給したいと努力するのは、殊に現代の生存競争烈しい社會に於ては、毫も無理からぬことであると謂はねばならぬ。

結婚當夜の美容が、数十年を経ても、變ることがないとするれば、人は互に如何に之を喜ぶであらうか。男女共、自己の身の美と云ふことを望むことは、實に當然の儀であらう。

然し、世の中には、自己の健康を、美容の犠牲に供する者も、多くある様であるが、是れは、誤れることの甚だしいものと謂はねばならぬ。何故に、斯く云ふかと云へば、斯の如き美容なるものは、實に眞の美容

美容は健康に伴ふ

健康保持の要件

で無いからである。

蓋し、美容は、健康と相俟つて之を期待し得るものであつて、決して是が相離るゝことの出来ないものである。されば、身の美容であらんことを望む者は、先づ、第一に、己の健康と云ふことを尊び重んじなければならぬものである。

そこで、美容上に、臥ても起きて居ても、決して忘れてはならぬ所の健康保持に就ての要件を擧ぐれば、次の様なものである。

- (一) 世事を全く悲觀しないこと、
- (二) 常に、満足と云ふことを、己の身上に顧みて尊び、憤怒、煩悶、憂鬱等を避け、嬉々として、何事にも快活なるべきこと、
- (三) 身體の強固を齎す様な運動を行ふこと、
- (四) 清潔なる空氣を十分に攝取する様に心懸くべきこと、
- (五) 夜は早く寝ね、朝は早く起ること、
- (六) 食欲を節すること、

(七) 肉慾を節制すること、
 (八) 利慾を専一とせざること、
 (九) 萬事、正直を主として、秩序を失はぬこと、
 (一〇) 萬事、中庸と云ふことを守つて勤勉なるべきこと、
 (一一) 傳染病等、一般の疾病に注意すること、
 (一二) 皮膚の養生に励むること、
 等である。

之を要するに、世の美容を望む者は、前掲せる諸要件を實行して、初めて爰に眞美と云ふことを得らるべきものであらう、と我等は信ずるものである。蓋し是が實際の眞理なるものであらう。

通俗科學的化粧法終



大正二年九月十九日印刷
 大正二年九月廿二日發行

科學的化粧法

正價金八拾錢

著作者 小山田 謙

著作者 三本松清吉

發行者 伊東芳次郎
東京市神田區鍛冶町八番地

印刷者 加藤隆一郎
東京市芝區愛宕町三丁目二番地

發行所 東京市神田區鍛冶町八番地
電話本局八八四番 振替東京一七一番
 東亞堂書房

(東京洋印株式會社印刷)

醫學士 小山田克己先生新著

醫者は如何なる程度まで信用すべきか

洋装美本全一冊
正價 金九拾錢
送費 金八錢

命の惜しき人は必ず見よ

醫者は如何なる程度迄信用すべきか。など云ふ問題を提出するの
は堂々たる國手先生方に對して、大に失禮に當るかは知らないが
お醫者様とて神様で無い以上、皆様が皆様に残らず御名醫計りで
もおはさないと云へぬ。多くの中には随分お見立て違ひやお薬違ひ
が無いとは云へぬ。ところが其のお見立て違ひ、お薬違ひの光榮に
預る、患者の立場から申上ると不自由な事には、誰れしもが「命」
と云ふもの、後にも先にもたつた一つの代理を仰せ附かつては、迎
新薬試験の對象物や、兎、モルモットの如き問題を提げて、患
者遣り切れたる者ぢやない。爰に於てか、上記の如き問題を提げて患
者對醫者の關係を明かにして置くべき必要の起るのには、哲學や科
學的の根柢に迄、近代的批判を試みねば已まぬ。現代人の當然履まね
ばならぬ順序では、御立腹ばし召されず、マア一度は讀んで
御覽遊ばせ。他山の石も藥になる哩とキツト御感心なさいませう

篠原無然郎先生著

容貌と人格

大判總クローズ頗美装
正價 九拾五錢
送費 八錢

人の社會に生くるや、其容貌の好悪が、吾人の生活に關し、得失不幸を招くの
大なるは實に日常目睹耳聞する處の事實たり。之れある哉、近時タルキンピテリッ
ト、スペンサー、ゾンド等出で、或は生物學的に、或は生理學的に、心理學的に、吾
人が相貌と性格との關係を研究して、賢愚、不肖、禍福、吉凶等の因つて來る所以を
論斷す。容貌は女子に於てのみの財産にあらざりて、男子に於ても亦重要な一財
産たるに至れり。而かも容貌の同じからざるは、其の心の如し、今俄かに天下の億
萬人を捉へて委く美男女たらしむべからずと雖も、佛陀の修養は、三十二相八十
隨形好を具へ、君子の盛徳は容貌愚なるが如きを致す。本書則ち吾人の人格が精神
の修養に依つて、向上大成するを得ると共に、吾人の容貌も亦た其人格の修養によ
りて陰鬱を變じて快闊に、嶮惡を化して溫雅たらしむるを得べき眞理と方法とを
古今東西の偉人名士が實例を根據とし、卓抜なる識見と、趣味ある筆致とを以て
科學的の一大解案を與ふ、眞に破天荒の新研究也。

陸軍一等軍醫 音尾博士先生編

家庭醫典

大判函入總クロー
全一冊 七百六頁
正金 貳圓七拾錢
送費 拾六錢

本書は、衣食住の衛生、人體の病理と生理、人體各部の衛生、婦人衛生、育兒法、細菌學の大意、看護法、繻帶の用意、簡易診察法、治療上の介助、救急の療法等より、消化器病、呼吸器病、心臓病、腦病、精神病、神經衰弱、産婦人病、眼病、小兒病、耳鼻咽喉病、花柳病、皮膚病、レウマチス、外傷、瘰癧、脚氣、糖尿病、傳染病等の各療法に互に、振がな付にて如何なるしるふとにも了解し得べきやう、運動、入浴、睡眠等の諸注、意、茶、煙草、酒等の利害、按摩法、電氣療法、人工呼吸法、人工營養法等に迄及び、最新調理法、溫泉の効能、喰合せ、飲料水、牛乳等の試験法、人工營養法等に迄及び、最新醫學の全般と、衛生學、理化、藥物學其他諸科學の最新知識を網羅し、信頼すべき家庭日常の相談相手たらしめたる『通俗醫學百科辭書』にして、瀬川博士の『願はくば家々をして一本を蔵せしめば百年の壽を保ち千祥を享けん』と贊せられ、山口博士の『本書の遍く家庭に普及すれば衛生上裨益すること多きを信ず』と激賞せられたる一大良著也。何人も必ず一本を蔵せられよ。眞に家族全體に生命保險を附するよりも利益多し。

醫師 青風白雨樓主人著

お医者論

菊判二百三十頁
正價 七拾錢
送費 八錢

醫は仁術なりなど買被つて、安心してござる御仁は、大正の新時代には、生存の資格なきお人好し也。お醫者なりとて、喰はねばならぬ以上は儲けねばならず。とは云へ患者なりとて、重曹や、杏仁水を、無暗に高く賣附けられたのでは溜つた物に非ず。仁術か、不仁術か、お醫者論一卷。著者自から身を刀圭界に置きて此素破抜をなす、元より、以來闇の夜に獨あるきの出來ぬ位は覺悟の前也。人は病の器と云ふ。お醫者の御厄介にならぬ人、お醫者の御厄介にならぬ家がない以上は、是非何人も読んで置かねばならぬ浮世學問！但し命の惜しくない人は此限にわらず。

赤堀 菊子 先生 著

和洋 簡易料理

洋裝金字入頗美本
正價 壹圓參拾錢
送費 八錢

是迄、御料理の本も、随分と澤山出来て居りますが、多くは高價な材料がいつたり、非常に手数が掛つたり、特種な器具や、技術やがいらまして、なか／＼甘くお素人方には出来ませぬが、此書は一切これ等の不便を除き、何處にでも有りふれた、安價な材料を巧みに利用し、ごく簡単に、手ばしこくお客様が一ツふく召上つていらつしやる間に、和洋さまざまのお料理や、お菓子迄がおいしく出来ると云ふ、著者と發行書肆とが新工夫を凝らした御本です。家事に御熱心な奥様方は、是非欺されたと思召して一冊買つて御覽遊ばせ、あくる日から旦那様の御料理屋這入りはふつり止んで、御生計費がビツクリする程減るのみか、それは御一家團樂の楽しい御家庭が作られます。

白柳秀湖先生苦心の大著

大日本閨門史

箱入洋布頗美本
全一冊八百餘頁
正價 貳圓五拾錢
送費 拾貳錢

歴史を知らむと欲せば、須らく女を見よ。犯罪の裏面には必ず女あると同時に、巨動濤業の裏面には亦必ずや閨門の力あり。岩戸神樂の始より、女ならば夜明けの、我が東海姫氏國の支配者は、古きいにしへに於て女性にておはしき。本書は著者が其社會科學と歴史哲學の立脚地より、炬の如き觀察眼を、我が國史の表裏に馳せて、天照皇大神より近世に到る、各階級の卓絶せる日本婦人が、異性たる偉人英雄の影に副ひて、民族發展上に顯はれたる、將た隠れたる偉大なる「力」を研究し、日本婦人の社會的地位を明かにせる未曾有の新研究にして、著者が簡勁にして雅麗なる筆は、花朧しき優姿に黒鐵の鏡かぶと着て、戰陣の間に、くはし矛千足の國のますら夫を生める雄々しの女性を描き、呼び交はす歌垣に哀切なる戀を語りて、綿々の情を、數島の道に傳へたるいたいのうまし乙女を寫し、紅紫綠亂、趣味津津々、女子の貞操を論じ、古今の道徳を批判し、生活を檢し、經濟を説き、人を擧ぐるごとく一千三百餘家、詩歌を引くこと一百數十首、逸話を博引し、挿話を交錯し、縦に之を讀むときは、閨門の勢力を中心として見たる日本歴史の裏面觀察にして、横に之を見るときは、古來才子と佳人との纏綿たる情緒を背景とせる戀の日本英雄史也。文明は一日にして成るものに非ず、歴史を離れて民族なし。近時「婦人の解放」「新しき女の自覺」を説くの高き時、婦人問題の基本的參考書として教育家、經世界、社會研究家は勿論、男女孰れを問はず必ず一讀すべき快著也。

陸軍一等軍醫 音尾博士 著	大場健兒先生 著	中野時一郎先生 著	忽滑谷快天先生 著	足立栗園先生 著	足立栗園先生 著	本多五陵先生 著	堀田文學士共著
秘密病の新療法	どもり矯正の實驗	春夏秋冬 救急顧問 旅行の衛生	養氣鍊心の實驗	鍛心鍊身 養氣法	鍛心鍊身 靜坐内觀祕法	朝起のすゝめ	圓滿生活論
中判洋装 全一册	中判洋装 全一册	總布洋装 全一册	大判洋装 全一册	大判洋装 全一册	大判洋装 全一册	中判洋装 全一册	大判洋装 全一册
送正 費價 四拾五 錢錢	送正 費價 四拾五 錢錢	送正 費價 八拾五 錢錢	送正 費價 八拾 錢錢	送正 費價 八拾五 錢錢	送正 費價 八拾 錢錢	送正 費價 四拾五 錢錢	送正 費價 八拾 錢錢

382
382

終

